

すべての子どもたちの確かな学力の定着をめざして

－ 児童生徒の学力定着調査・意識調査と、 保護者の生活意識調査の分析を通して －

学力の問題については、国際的な調査や国の教育課程実施状況調査の結果等から、読解力が低下していることや学習意欲に課題があることが指摘されている。このような課題に対処し、確かな学力の定着にむけて授業改善を進めるためには、まず、児童生徒の学力実態や学習に対する意識を把握することが大切である。

本研究では、2005年4月に京都市教育委員会が教育研究会と共催で実施した「学力定着調査」「児童生徒の意識調査」「保護者の生活意識調査」の結果を受け、京都市の児童生徒の学力実態をより明らかにするための工夫を加えながら、学力と生活意識について分析と考察を進める。そして、一人一人の子どもたちの豊かな学力の確かな定着を願い、授業改善の視点・家庭への働きかけへの視点として、若干の提言を行う。

目 次

はじめに 1

第1章 今、課題となっていることは何か

- 第1節 学力実態分析に求められる視点
 - (1) 習熟度レベル別でみる視点～国際的にみた日本の学力実態から～ 1
 - (2) 学力を分析的にとらえる視点 3
 - (3) 学力実態分析を進めるための3つの視点 4
- 第2節 今、求められる家庭との連携
 - (1) 学ぶ「意欲」や「学習習慣」に課題 4
 - (2) 求められる家庭への支援 5
- 第3節 調査の概要
 - (1) 意識調査の構造と設問の構成 6
 - (2) 調査実施の概要 6

第2章 「学力定着調査」の分析を通して

- 第1節 小学校「学力定着調査」の結果から
 - (1) 国語 8
 - (2) 社会 10
 - (3) 算数 10
 - (4) 理科 12
 - ＜概括1＞ 13
- 第2節 中学校「学力定着調査」の結果から
 - (1) 国語 14
 - (2) 社会 14
 - (3) 数学 15
 - (4) 理科 17
 - (5) 英語 19
 - ＜概括2＞ 20

第3節 「学力定着調査」分析のまとめ

第3章 「意識調査」の分析を通して

- 第1節 子どもたちの意識調査から
 - (1) 家庭生活 21
 - (2) 家庭学習 23
 - (3) 学校での学習 25
 - (4) 自己・他者認識 26
- 第2節 保護者の生活意識調査から
 - (1) 生活 27
 - (2) 子どもへのかかわりと学習把握 28
 - (3) 家庭学習 28
 - (4) 学校とのかかわり 29
 - (5) 教育や社会に対する考え 31

第4章 確かな学力の定着を願って

- 第1節 授業改善にむけて
 - (1) 「学習意欲」を高めること 32
 - (2) 学び進める力を身につけること 32
- 第2節 家庭への働きかけにむけて
 - (1) 学びの「環境作り」を進めること 33
 - (2) 家庭での学習を習慣化すること 34

おわりに 34

付 表 35

＜研究担当＞ 西田 晋 (京都市総合教育センター研究課 指導主事)

＜研究協力校＞ 京都市立小・中学校

はじめに

京都市教育委員会では、2002年度より、小学校1,2年生は国語と算数、小学校3～6年生は国語・社会・算数・理科、中学校1～3年生は国語・社会・数学・理科・英語で学力テストを実施している。筆者は、その結果について、毎年、自校や自学級の学力実態分析を進めてきた。しかし、振り返ってみると、今まで筆者が行ってきた分析の多くは、昨年度の平均点との比較や、正答率の低い問題に着目するものであった。それは、平均点が昨年度と比べて上回っていたかどうかで一喜一憂するものであったり、正答率が低かった小問にこだわったりしたものであった。例えば、「今回のテストで“反省する”に読み仮名をつける問題の正答率が低かったので、これだけは読めるようにしておこう」といった類である。正答率が低かった問題に着目し、できなかったことを補うための指導は必要である。しかしながら「年間を通した授業改善の視点になっていたのか」「子どもの主体的な学びの姿を支える分析ができているのか」という自問をしたときには、反省すべき点があった。

2005年4月に京都市教育委員会は「平成17年度学力定着調査テスト」と「児童生徒の意識調査」「保護者の生活意識調査」を同時に実施し、5月にそのデータを集約した。この結果を受け、筆者は小学校6年生と中学校3年生のそれぞれ約1,000名分の抽出したデータについて分析を進める。

分析を進めるにあたっては、自身の反省をふまえ、全体の平均点の比較だけではなく、京都市の児童生徒の学力実態をより明らかにするための工夫を加えていきたい。そして、一人一人の子どもたちの豊かな学力の確かな定着を願い、授業改善の視点・家庭への働きかけへの視点として、若干の提言を行いたい。

第1章 今、課題となっていることは何か

第1節 学力実態分析に求められる視点

(1) 習熟度レベル別にみる視点

～国際的にみた日本の学力実態から～

日本の子どもたちの学力は、世界の国々と比べてとき、どのような実態がみえてくるのだろうか。

経済協力開発機構(OECD)では、2000年より国際的な「生徒の学習到達度調査」(PISA)を実施している。2003年には41カ国・地域の15歳の生徒27

万6千人を対象に第2回調査を実施し、その結果を、2004年12月7日に世界同時発表した。

これらの結果をまとめた報告書(1)から、国際順位を取り出したものが表1-1である。2003年の調査では、数学的リテラシー・科学的リテラシー・問題解決能力は、フィンランド、韓国などの上位国と有意差はなく、1位グループに属している。しかしながら、加盟国の平均値を前回の2000年調査結果と比較すると、数学的リテラシーは6位(3年前の前回は1位)、科学的リテラシーは2位(前回2位)という結果であった。また、前回8位であった読解力は14位となり、順位を下げる結果となった。

表1-1 OECD 生徒の学習到達度調査(PISA) 2003年調査
平均得点の国際比較 *はOECD非加盟国

	数学的 リテラシー	読解力	科学的 リテラシー	問題解決 能力
①	*香港	フィンランド	フィンランド	韓国
②	フィンランド	韓国	日本(前回2位)	*香港
③	韓国	カナダ	*香港	フィンランド
④	オランダ	オーストラリア	韓国	日本
⑤	*リヒテンシュタイン	*リヒテンシュタイン	*リヒテンシュタイン	ニュージーランド
⑥	日本(前回1位)	ニュージーランド	オーストラリア	*マカオ
⑦	カナダ	アイルランド	*マカオ	オーストラリア
⑧	ベルギー	スウェーデン	オランダ	*リヒテンシュタイン
⑨	*マカオ	オランダ	チェコ	カナダ
⑩	スイス	*香港	ニュージーランド	ベルギー
⑪				
⑫		日本(前回8位)		

では、習熟度レベル別にみたときには、日本の子どもたちの姿は、どのように浮かび上がってくるのだろうか。

2000年と2003年に実施したPISAでは、生徒の習熟度を得点によってレベル分けを行い、調査内容ごとに各レベルの生徒の割合を示している。そこで、日本の調査結果と、今回の調査において総合的に上位に位置する結果を得ているフィンランド・韓国、そしてOECD平均と比較してみることにする。

まず、国際的に大きく順位を下げた「読解力」について、日本の2000年調査と2003年調査の結果を比較する。「読解力」では、得点によって高い方から低い方へ、レベル5からレベル1未満の6段階に分け、各レベルの生徒の割合を示している。この結果を、次頁図1-1に表した。これを見るとレベル5の割合は前回調査とあまり変わっていない。しかし、レベル1未満、レベル1、レベル2に属する割合は、2000年調査と比べると多くなっていることがわかる。

さらに「読解力」の2003年調査結果について、日本・フィンランド・韓国・OECD平均を習熟度のレベルから比較するため、次頁図1-2に表した。

図 1-1 日本の「読解力」(PISA2000, 2003 年)の結果比較

	レベル1 未達	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	国際 順位
日本2003	7.4	11.6	20.9	27.2	23.2	9.7	14位
日本2000	2.7	7.3	18	33.3	28.8	9.9	8位

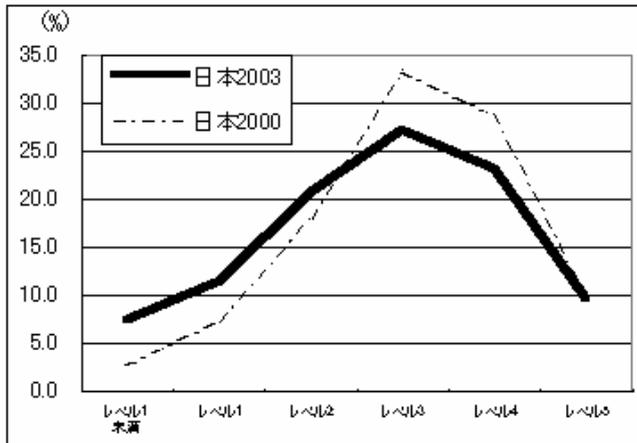


図 1-2 PISA 2003 年調査「読解力」の国際比較

	レベル1 未達	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	平均 得点	国際 順位
フィンランド	1.1	4.6	14.6	31.7	33.4	14.7	543点	1位
韓国	1.4	5.4	16.8	33.5	30.8	12.2	534点	2位
日本	7.4	11.6	20.9	27.2	23.2	9.7	498点	14位
OECD平均	6.7	12.4	22.8	28.7	21.3	8.3		

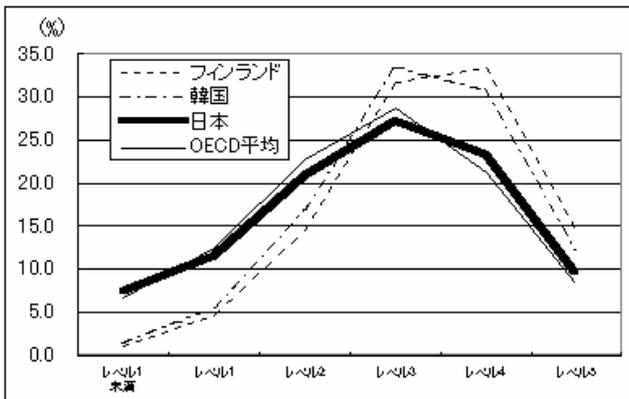
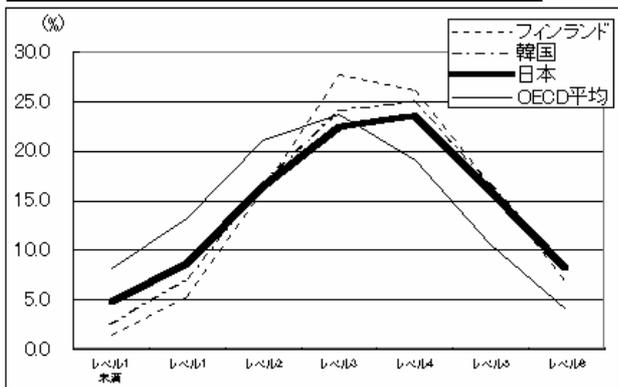


図 1-3 PISA 2003 年調査「数学リテラシー」の国際比較

	レベル1 未達	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	レベル6	平均 得点	国際 順位
フィンランド	1.5	5.3	16.0	27.7	26.1	16.7	6.7	544点	1位
韓国	2.5	7.1	16.6	24.1	25.0	16.7	8.1	542点	3位
日本	4.7	8.6	16.3	22.4	23.6	16.1	8.2	534点	6位
OECD平均	8.2	13.2	21.1	23.7	19.1	10.6	4.0		



すると日本は、OECD 平均とほぼ同じような傾向を示しているが、それに対して、フィンランドと韓国は、ともにレベル 1 以下の生徒の割合が日本と比べて少ないことがわかる。

次に「数学的リテラシー」の 2003 年調査結果を比較するため、図 1-3 に表した。「数学的リテラシー」では生徒の習熟度を高い方から低い方へ、レベル 6 からレベル 1 未達の 7 段階に分け、各レベルの生徒の割合を示している。これを見ると日本のレベル 6 及びレベル 5 の生徒の割合はそれぞれ 8.2%、16.1% であり、上位の習熟度レベルに関しては、フィンランドや韓国と大きな差はみられない。しかし、レベル 1、レベル 1 未達の割合をみると、OECD 平均よりは低い割合を示すものの、フィンランドや韓国と比べると、その割合が高いことがわかる。

「問題解決能力」についてはどうだろう。同様に 2003 年調査結果について比較するため、次頁図 1-4 に表した。「問題解決能力」では生徒の習熟度を高い方から低い方へ、レベル 3 からレベル 1 未達の 4 つのレベルに分け、各レベルの生徒の割合を示している。すると、日本の生徒はレベル 3 の割合が高いこととともに、レベル 1 未達の割合がフィンランドと韓国と比べて多いことがわかる。

最後に「科学リテラシー」について比較する。「科学リテラシー」では、400 点より低い生徒の割合と、600 点より高い生徒の割合について比較するため、次頁図 1-5 に表した。その結果、日本の方は 600 点より高い生徒の割合が、フィンランドと韓国よりも多いことがわかる。また、400 点より低い生徒の割合についても日本は他国より多い。特に注目すべきは、フィンランドの 400 点より低い生徒の割合が 5.7% であることである。

以上のように、今回の調査において総合的に上位に位置する二つの国と習熟度レベルの割合で比べた場合、日本の学力について「上位層の生徒の割合は高い」ことがわかった。同時に「下位層の生徒の割合が、国際的に上位の国に比べて多い」こともわかってきた。

PISA 2000 年調査と PISA 2003 年調査の結果、領域ごとの平均得点を比較すると、国際的に順位が下がったことがわかる。ただ、その理由は、全体の得点率が一様に下がったということではなく、前述のように、「下位層の生徒の割合が高い」ことが、その理由の一つとしてうかがえる。日本の生徒の学力実態は、習熟度レベルごとの比較を通してより明らかになってきたといえる。

このように、学力調査の結果を、習熟度レベル別のように「学力階層」に分けて分析を進めることは、子どもたちの姿をより明らかにすることにつながる。そこで、京都市の児童生徒の学力実態を明らかにするために、「学力階層」に分けて分析を進めていきたいと考える。

図 1-4 PISA 2003 年調査「問題解決能力」の国際比較

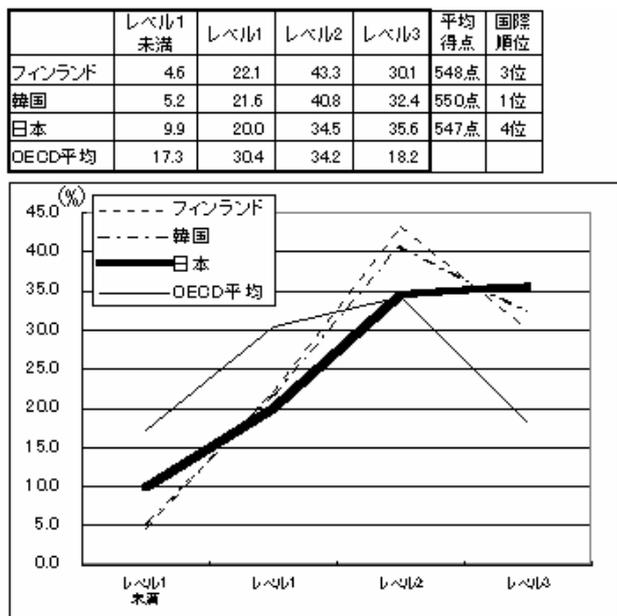
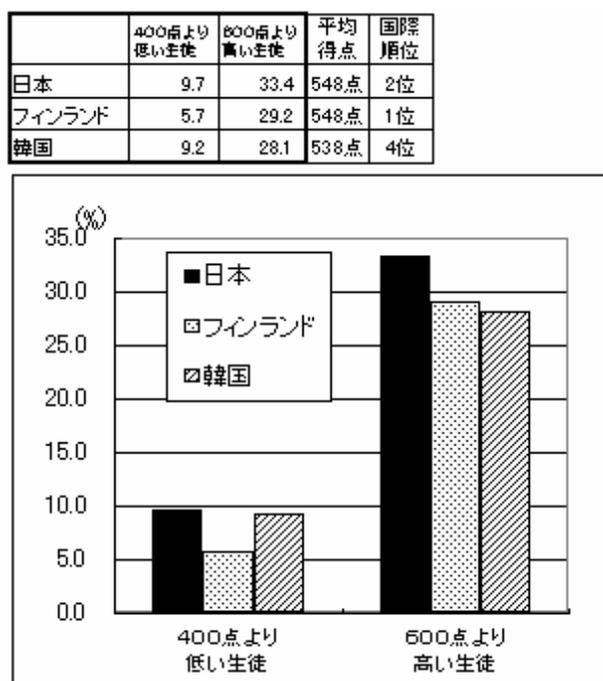


図 1-5 PISA 2003 年調査「科学的リテラシー」

得点が高い生徒、低い生徒の割合



(2) 学力を分析的にとらえる視点

それでは、学力を分析的にとらえるためには、どのような視点が必要なのだろうか。

各学校では、各教科の基礎・基本はもとより、自ら学び、自ら考え判断する力などの「確かな学力」を身につけさせるために、一人一人に応じた指導を進めている。指導者は、支え励まし育てる姿勢と、指導すべきは指導しきる姿勢を大切にしながら、日々の授業改善に努めている。

指導者が授業改善に努めるためには、「指導と評価の一体化」を図ることが必要である。指導者は日々の学習指導において、指導計画を立て、実践し、評価するという一連の活動を展開している。吉田辰雄は、評価の目的について「教育評価は診断的性格を備えたものであり、評価後の教育指導（学習指導）や治療、改善などに直結し、活用することが大切である」⁽²⁾と述べている。評価の結果を受けて、以後の指導の在り方を検討し、新たな指導の成果を再度評価するという姿勢が、授業改善を進めるために求められているといえる。

このように、評価は、指導者に対して指導過程の在り方をフィードバックし、次の指導に生かすことができるものである。つまり、指導と評価を一体化することは、授業改善の視点として生かすことにつながり、同時に「指導の質」そのものを高めることになる。

さて、この評価を行うためには、児童生徒一人一人の学習の実現状況を的確にとらえることが求められている。これは、平成12年12月教育課程審議会答申において「学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況をみる評価（いわゆる絶対評価）を一層重視し、観点別学習状況の評価を基本として、児童生徒の学習の到達度を適切に評価していくことが重要となる」⁽³⁾と述べられているとおりである。

そのために、以下の二つの評価の視点が重要になる。

一つめは、「目標に準拠した評価」によって学習状況を把握することである。学習指導要領では各教科の目標を内容や領域・分野別に定めており、この目標に準拠した内容の実現状況を把握することが必要である。

二つめは、「観点別学習状況の評価」によって学習状況を把握することである。「観点」とは、学習指導要領にある指導目標を、評価の立場からとらえたものである。ここでは「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」など

の観点からみて、学力を総合的に評価することが必要である。

以上にあげた評価の視点は、児童生徒の学習達成状況を把握する視点であると同時に、「つまずき」を課題として明らかにする視点でもある。

つまり、この評価の視点を、今回の学力実態分析の視点として位置づけることは、児童生徒の現状を分析的にとらえることにつながる。そして、児童生徒の学力実態についてプロフィールを作成し、診断することを通して指導の充実・改善に生かすことが可能になると考える。

(3) 学力実態分析を進めるための3つの視点

京都市の児童生徒の学力実態を分析するにあたり、次の3点に留意しながら分析を進める必要があると考えた。

一つめは「通過率をもとに上位より25%ずつ、A・B・C・D群の学力階層群を設定し、その群ごとに何が課題となっているのかを分析すること」である。国際調査の結果で前述したとおり、平均得点の比較だけでは、課題となることがみえてこない場合がある。そこで、学力階層群に分けて分析をすることで、特にD群の児童生徒が、どのような領域や観点でつまずきを示しているのかを探り当てることができる。この分析の結果は、授業を展開する上で、だれにどのような支援を用意する必要があるのかを考える上で、有用な観点になると考える。(4)

二つめは「二つの評価の視点から分析すること」である。それらは、各教科の目標に準拠した「内容・領域別」に分析を進めることと、評価の「観点別」に分析を進めることである。例えば、国語科の「書く」領域の通過率はどうなっているのか、算数科の「図形」領域の「関心・意欲・態度」はどうなっているのか、などのように焦点をしばって分析を進めることとする。これにより、現段階でさらにのばせることや克服すべき課題がどこにあるのか、内容・領域別・評価の観点別にプロフィールをつくることのできるのではないかと考える。

三つめは『「平均通過率に対する指数」という指標を設けて分析すること』である。平均通過率は問題の難度によって変わるため、基準となる指標が必要となる。今回は「全市の平均通過率」をその基準とし、それをもとに結果を指数化することで各群の比較を少しでも容易にできるようにしていきたい。

以上の三つの視点を加えて、児童生徒の学力実態分析を進めることは、前年度との比較だけではみえてこない課題を、浮き彫りにすることになるであろう。そして、プロフィールの作成や診断を通してみえてきた児童生徒の実態や課題は、指導者自身の指導過程の在り方を見直す契機となり、「わかる授業」「楽しい授業」を展開するための授業改善の視点を与えてくれると考える。

第2節 今、求められる家庭との連携

(1) 学ぶ「意欲」や「学習習慣」に課題

では、学校生活を送る児童生徒の学習に対する意識や習慣はどのようなものであろうか。

PISA(OECD生徒の学習到達度調査)2003年調査(5)では、学校質問紙や生徒質問紙の結果、生徒に起因した学級雰囲気指標、生徒のモラル指標、学校施設指標、教育機器・機材指標などを導きだし、調査問題との関連を図りながら分析した結果を公表している。例えば、学級雰囲気指標では、韓国や日本について「生徒は良好な学級の雰囲気をもっている傾向にあること」(6)のように述べている。

PISA2003年調査の、学校質問紙、生徒質問紙の分析結果を受けて井上卓己は「生徒が授業を受ける姿勢は諸外国に比べて良好であるものの、数学で学ぶ内容に興味がある生徒が少なく、学校以外の勉強時間が短いなど、学ぶ意欲や学習習慣に課題があることがわかっている」(7)としている。

さらにTIMSS2003(8)の調査で実施した教師・児童生徒へのアンケート調査の結果を受けて、井上は「数学や理科の勉強は楽しいと思う、得意な教科であるという生徒が少ない、宿題をする時間が一番短いなど、PISAと同様に、学ぶ意欲や学習習慣に課題があることが分かっている」(9)と述べている。

また、平成15年度教育課程実施状況調査では質問紙による調査が行われ、児童生徒の意識実態について結果を公表している。

児童生徒の学習にむかう姿勢や、平日における学校の授業時間以外の学習時間など、学習意欲や学習習慣などに関しての質問を実施した結果として、山下恭範は、「学習意欲や学習習慣が身についた児童生徒ほどペーパーテストの得点が高い様子がうかがえる」(10)と見解を述べている。そして、「勉強が楽しいと思う児童生徒の割合は中学校では10%である」(11)のように、意欲的に学習をし

ている児童生徒の割合が少ないことを指摘している。

他の調査の結果ではどのような姿が浮かび上がってくるのだろうか。

ベネッセ教育研究所による調査の結果では、児童生徒の学力について偏差値による学力階層を設定し、学習習慣や意識との分析を行っている。それによると「小学生、中学生、高校生ともに、教科にかかわる驚きや感動体験、関心や意欲をもっているほうが、その教科の学力（平均偏差値得点）が高い」(12)としている。

以上のように、国際調査や国内の意識調査の結果からは、学ぶ「意欲」や「学習習慣」を、課題となる共通のキーワードとして示している。

学習に対する「意欲」は、確かな学力を支える大きな柱の一つであり、これからの時代に求められる「生きる力」をはぐくむ上でも大切な力である。この課題提示を契機に、授業の構成や学習形態、教材研究の在り方などについて、授業改善の視点をみいだすことができるはずである。「学習習慣」も同様に考えるならば、学校での指導の工夫や、学校からの家庭への働きかけの在り方について検討をすることができるはずである。このように子どもたちの生活実態や意識にせまることは、従来の取組の見直しや、今後、重点化する取組の在り方を検討する上で大切なキーワードを提示することになる。

(2) 求められる家庭への支援

次に、家庭へ目をむけてみることにする。

厚生労働省が行った平成 15 年国民生活基礎調査(13)によると、児童のいる世帯の状況は核家族世帯が 946 万 8 千世帯（児童のいる世帯の 73.1%）、三世帯世帯 310 万世帯（同 23.9%）という状況であり、児童の多くが核家族の中で養育されているという現状が示された。このような核家族化の傾向にあることをふまえ、山崎美貴子は、祖父母との同居世代の減少、都市化、工業化に伴う家族間の結びつきや交流に変化が生じてきていることを指摘し、現代の子育て家族、地域での状況からだれもが「『育児不安』『子育ての社会的孤立』を体験しやすい環境の中にいる」(14)ことを指摘している。

『平成 16 年版少子化社会白書』(15)では、少子化が進行する理由に言及しながら「子育てに関する地域内のコミュニケーションが進んでいない傾向がみられ、あるいは、しつけや子育てに自信が

もてない親が増加している」(16)と述べ、家庭教育に関する学習機会や情報提供などの支援体制の充実について提言を行っている。

すでに、文部科学省では、子育てに関する学習会の提供や全国家庭教育フォーラムを開催し、家庭教育に関する学習機会や情報の提供を進めている。また、新家庭教育手帳の作成・配布を通じて子育てのヒントについて情報提供を行っている。厚生労働省では、地域における子育て支援のネットワークづくりを支援するために、「子育てサポーター」の養成・配置など、「子育て支援総合推進事業」や「家庭教育支援総合推進事業」を行い、地域における相談体制の一層の充実を図っている。

さらに、ベネッセ教育研究所が実施した家庭教育方針に関する調査結果によると「1998 年に比べて、『世間一般の流れに乗り遅れない』『習い事や塾に通わせないと不安』が増加していて、教育に対する不安が高まっていることがわかった」(17)としている。

情報提供をはじめとする家庭への支援を通して、保護者が安心して子育てができる環境を整えることは、児童生徒の確かな学力の定着を進めるために必要不可欠な条件の一つである。現在の社会状況をふまえたとき、学校と家庭との連携を進め、特に子育てについて不安や迷いをもつ家庭に対して十分な働きかけや情報提供を行うことが求められていると考えられる。

京都市教育委員会では、『平成 17 年度 指導の重点』のなかで「家庭は教育の原点であり、基本的な生活習慣の形成や躰、情操の涵養、道徳性の育成などを担い、地域は人間関係の基礎や社会的ルールを体験のなかで学ぶ場である」(18)と掲げている。そのなかでも、学校は教育活動の現状と課題についての情報を常に保護者・地域に提供しながら連携をする必要性を説いている。

すでに京都市では、身近な地域の保育所・児童館を「地域子育て支援ステーション」として位置づけ、子育てについての相談や子育て講座を実施するなどの事業を推進している。また、京都市教育委員会では『家庭学習の手引き』(19)を児童生徒を通じて各家庭に配布し、家庭における学習環境作りや家庭学習をさらに進めるための情報提供を行っている。

今回の研究では、児童生徒の学力向上にむけて家庭でどのようなことができるのか、どんなことを大切にしなければならないのか、といった観点を中心に、さらに具体的な提言ができるように考

察を深めていきたいと考える。

第3節 調査の概要

学力定着調査・児童生徒及び保護者に対する意識調査については、京都市教育委員会が平成17年4月に実施した結果による。ここでは、児童生徒及び保護者に対する意識調査の問題の基本的な考え方について述べることにする。

(1) 意識調査の構造と設問の構成

<調査の趣旨・目的>

児童生徒の学力実態と児童生徒の学習等にかかわる意識調査及びその保護者の生活意識調査の結果を受け、実態把握を行う。

実態の把握を通して、学力向上にむけた児童生徒及び家庭への働きかけの手がかりを提示する。

<意識調査の基本的な考え方>

意識調査は択一式の質問紙による。設問の選択肢は可能な限り量的または頻度や程度を問うものとし、客観的に把握ができるように努めた。

意識調査の対象は子どもの成長の変化を把握することを視野に入れ、小学校6年生、中学校3年生とする。児童生徒を対象とした意識調査は、小学校6年生では全児童数の10%程度を対象とし、中学校3年生では全生徒数の10%程度を対象とする。保護者を対象とした生活意識調査は、意識調査を行った児童生徒の保護者を対象とする。

また、意識調査（児童生徒対象）及び生活意識調査（保護者対象）の抽出にあたっては、行政区、学校規模等のバランスを考慮する。

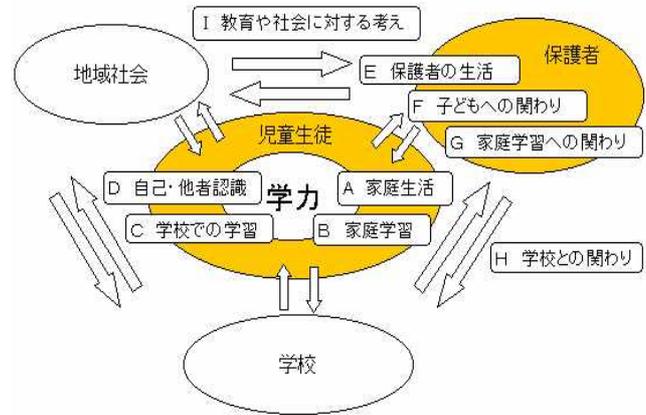
調査結果の分析にあたっては、学力定着調査、意識調査（児童生徒対象）、生活意識調査（保護者対象）の3つがそろったデータのみを分析対象とする。

<調査の内容>

児童生徒対象の意識調査は、学校生活だけでなく、家庭生活や自己に対する意識についても調査し、学力との関係を考察したいと考え、「家庭生活」「家庭学習」「学校での学習」「自己認識等の意識」の4つのカテゴリーを構成した。また、保護者対象の生活意識調査は、児童生徒や学校とのかかわりだけでなく、保護者の価値観などについても調査し、学力との関係を考察したいと考え、「保護者

の生活」「子どもへのかかわり」「家庭学習へのかかわり」「学校とのかかわり」「教育や社会に対する考え」の5つのカテゴリーを構成した。図1-6は児童生徒・保護者・学校・地域社会と調査の内容を構造図に表したものである。

図1-6 調査構造



児童生徒の学力を中心とした相互の関連を分析することで、授業改善を中心とした取組の見直しや家庭への働きかけについて、考察を導き出せると考えたからである。

さらにこの調査構造にそって児童生徒用38問、保護者用28問の調査問題を作成した。設問の構成については次頁表1-3、表1-4に示す。また、クロス集計による分析によって、各カテゴリーの関連を明らかにし、学力向上にむけて課題となる背景が明らかになるのではないかと考えた。

(2) 調査実施の概要

調査実施の概要は以下のとおりである。

①調査対象

小学校6年生児童、中学校3年生生徒およびその保護者

②調査の時期と方法

平成17年4月11日（月）～4月28日（木）
児童生徒については、学級単位で一斉に実施。保護者については、アンケート用紙を封筒に入れて児童生徒が持ち帰り、保護者が記入後、児童生徒を通じて担任が回収した。

③有効回答数及び標本誤差

小学校6年生、中学校3年生の児童生徒及び保護者の有効回答数は表1-5のようになった。

表1-5 平成17年5月1日現在

	小学校6年生	中学校3年生
全市	11,102人	10,243人
有効回答数	1,027件	876件

表1-3 児童生徒への設問構成一覧

	設問番号	設問項目
A 家庭生活	問1	生活…体調
	問2	生活…充実感
	問3	生活リズム…就寝
	問4	生活リズム…朝食
	問5	生活環境…朝食時の状況
	問6	生活環境…夕食時の状況
	問7	家庭環境…家族団らん
	問8	学校の屋食(中学生のみ)
	問9	生活実態…テレビ視聴時間
	問10	生活実態…コンピュータ利用
	問11	生活実態…テレビ視聴内容
B 家庭学習	問12	家庭学習時間
	問13	家庭学習の必要性
	問14	読書の冊数
	問15	親子の会話
	問16	学習への保護者の関与
	問17	読み聞かせ経験
	問18	生活経験…自然体験, 社会経験
	問19	学習塾の頻度
	問20	習い事の頻度
C 学校での学習	問21	授業の理解度
	問22	授業の楽しさ
	問23	授業への積極性
	問24	学習での達成経験
	問25	学習での励まし
	問26	調べ方, 調べる姿勢
	問27	整理の仕方, まとめる姿勢
	問28	発表の仕方, 姿勢
	問29	学習に向かう姿勢
	問30	学習の意義
D 自己・他者認識	問31	対家の人…被受容感
	問32	対家の人…願い・期待
	問33	対友だち…被受容感
	問34	対教師…被受容感
	問35	対教師…願い・期待
	問36	対自分…肯定感
	問37	対自分…受容感
	問38	対自分…将来展望

さらに調査精度をみるために一般的な標本調査で用いる統計学の数式(20)によって信頼度を95%として標本誤差を算出したところ、小学校6年生で±3.06、中学校3年生で±3.31となった。(これは、回答が最大の誤差をとる50%の場合において、それぞれ46.94%から53.06%、46.69%から53.31%の範囲内にその誤差が収まるという意味である。)

表1-4 保護者への設問構成一覧

E 生活	問1	実態…テレビ視聴
	問2	実態…読書
F 子どもへの関わり	問3	話し合い
	問4	話を聞くとき
	問5	休日の子どもの様子
	問6	生活リズムの約束
	問7	テレビ視聴などの約束
	問8	コンピュータの約束
	問9	家事分担の約束
	問10	子育ての重点
	問11	子どもへの悩み
	問12	子育てについての悩み
	問13	子どもの将来
G 家庭学習等	問14	子どもの学習把握
	問15	家庭学習への関わり
	問16	学習塾について
	問17	習い事について
H 学校との関わり	問18	授業参観や懇談会への参加
	問19	学校行事やPTA活動への参加
	問20	担任とのコミュニケーション
	問21	担任や教師に対する評価
	問22	学校に対する評価
	問23	保護者同士のコミュニケーション
I 教育や社会に 対する考え	問24	地域の子ども
	問25	教育情報の入手
	問26	学校や教師に求めること
	問27	子どもの問題について
	問28	社会の見方について

- (1) 『生きるための知識と技能(2) OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)2003年調査国際結果報告書』ぎょうせい 2004.12
- (2) 吉田辰雄「第2章 教育評価の目的・機能・領域」『教育評価の理論と実際』福村出版 1985.9 p.37
- (3) 文部科学省「第1章 2節 2(1) 目標に準拠した評価及び個人内評価の重視」『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について(教育課程審議会答申)』教育課程審議会 2000.12

- (4) 全体を四分分割する理由は、次の二点を考慮したことを付記する。一つめは、統計解析の分野では、データの分布の形状を調べる上で「四分位」という手法が一般的に用いられていることである。これは調査したデータを大きさの順にならべ、下から順に四分の一、四分の二、四分の三となる値を求め、全体の分布の形状を調べる上で使用されている指標の一つである。二つめは、これまで筆者自身が授業を進めるにあたって、つまづきが予想される児童を焦点化して指導を進めてきた経験則によるものであり、焦点化した児童のおよその割合を参考にしたものである。
- (5) 2003年にOECD（経済協力開発機構）が実施した学力調査。The Program for International Student Assessment（学習到達度調査）の略。調査の対象となるのは、義務教育修了段階の15歳の学生。
- (6) 前掲(1) p. 242
- (7) 井上卓己「最近の主な学力調査の動向について」『指導と評価』日本図書文化協会日本教育評価研究会 2005.6 p.7
- (8) 2003年にIEA（国際教育到達度評価学会）が実施した国際的な学力調査。国立教育政策研究所は、IEAの「国際数学・理科教育動向調査の2003年調査（Trends in International Mathematics and Science Study 2003：略称TIMSS2003）」に参加し、調査の実施及び分析に取り組んできている。
- (9) 井上卓己「最近の主な学力調査の動向について」『指導と評価』日本図書文化協会日本教育評価研究会 2005.6 p.7
- (10) 山下恭範「教育課程実施状況調査の結果」『指導と評価』2005.9 p.8
- (11) 前掲 p.9
- (12) ベネッセ教育研究所『第3回学習基本調査「子どもたちの学力を左右する要因は何か…」速報版No.2』2002.1 p.10
- (13) 厚生労働省 国民生活基礎調査平成15年「1世帯票第25表 児童のいる世帯数、世帯構造・父母の就業状況・児童数別」大臣官房統計情報部社会統計課国民生活基礎調査室
- (14) 山崎美貴子「特集孤立する課程をどう支援するか」『児童心理』No.815 金子書房 2004.12 p.22
- (15) 内閣府『平成16年度少子化社会白書（平成16年度版）』株式会社ぎょうせい 2004.12
- (16) 前掲 p.45
- (17) ベネッセ教育研究所『第3回学習基本調査「子どもたちの学力を左右する要因は何か…」速報版No.2』2002.1 p.6
- (18) 京都市教育委員会『平成17年度 指導の重点』2005.3 p.2
- (19) 京都市教育委員会『家庭学習の手引き 家庭を学びの環境に～すすんで学ぶ子どもを目指して』2005.3
- (20) 岩永雅也他『社会調査の基礎』放送大学教育振興会 2001 p.74
標本誤差（E）の算出は次式による。

$$E = |P - p| = 1.96 \times \sqrt{\frac{P(100-P)}{n}}$$

P：母集団の統計値（%） p：標本の統計値（%） n：標本の規模

第2章 「学力定着調査」の分析を通して

本章では、2005年4月に京都市教育委員会が実施した「平成17年度 学力定着調査」の結果を受けて分析をする。

第1節 小学校「学力定着調査」の結果から

（1）国語

次頁表2-1は、「小6国語 観点別の通過率」を示したものである。前章で述べたように、評価の観点別に上位より25%の児童をA群、以下25%ずつをB群・C群・D群とし、群ごとに通過率の平均値を示した。

さらに、その結果を群ごとにグラフ化したものが、次頁図2-1-1～図2-1-4である。

これをみると、「各群のどの観点において、通過率が高かったのか（低かったのか）」について検討することができる。

小6国語の結果からは以下の内容が読み取れる。

- ・A群の平均通過率は、すべての観点について、ほぼ90%以上の通過率を示している。
- ・A群と比べ、B群は「関心・意欲・態度」「読む」観点において通過率が低くなっており、C、D群では、その傾向が顕著に表れる。
- ・D群では、全体的に通過率が低い。特に「関心・意欲・態度」「読む」観点において、他の観点よりも通過率が低い。

さらに次頁図2-1-5では、各観点におけるA・B・C・D群の通過率を比較することができるように、一つにまとめてグラフ化した。これをみると、各群の通過率に差があることは明らかであり、「関心・意欲・態度」「読む」観点の通過率に、大きな差があることを読み取ることができる。

ただし、平均通過率は問題の難度によって変わるため、基準となる指標を設けることで「どの観点において、各群の差が生じているのか」について細かく分析をすることができる考えた。

そこで「平均通過率に対する指数」を設けた。これは「全体の平均通過率」を基準とし、それをもとに各群の通過率の結果を比較できるように指数化したものである。これにより、難度に大きく左右される通過率の比較についての問題点を、少しでも解消しながら、各群を比較することができる。と考える。「平均通過率に対する指数」は以下の式で算出した。

<各群の平均通過率÷全体の平均通過率×100>

（以下、算出した指数はp（ポイント）とし、論述する）

表 2-1 小 6 国語 観点別の通過率

	観点別の通過率									
	関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語事項	関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語事項
A群	1.7	86.7%	4.6	92.9%	2.8	94.9%	2.7	91.0%	11.2	93.3%
B群	1.5	73.7%	4.3	86.4%	2.6	85.3%	2.3	75.6%	10.2	84.8%
C群	1.1	56.8%	4.1	81.2%	2.2	72.1%	1.8	61.2%	9.1	75.5%
D群	0.7	34.0%	3.4	68.0%	1.6	52.4%	1.4	45.3%	6.5	54.2%
平均値	1.3	62.8%	4.1	82.1%	2.3	76.2%	2.0	68.3%	9.2	76.9%
満点	2	5	3	3	12					

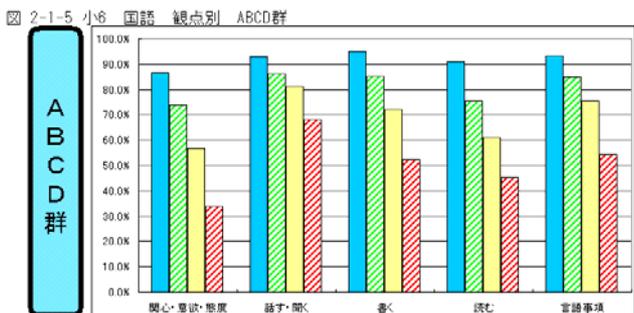
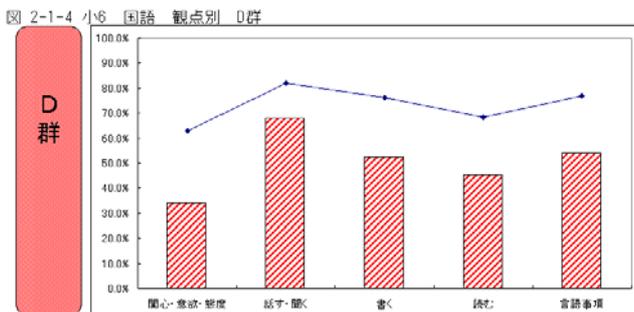
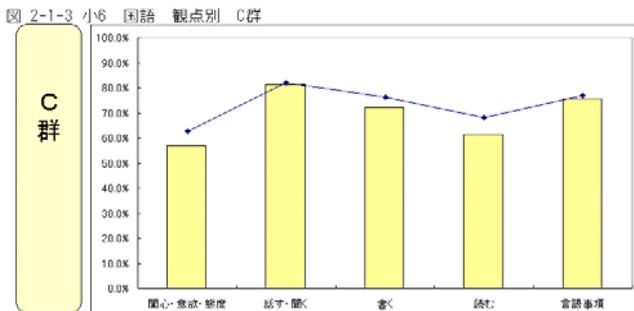
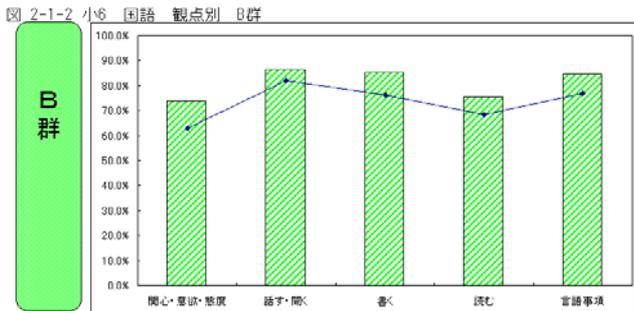
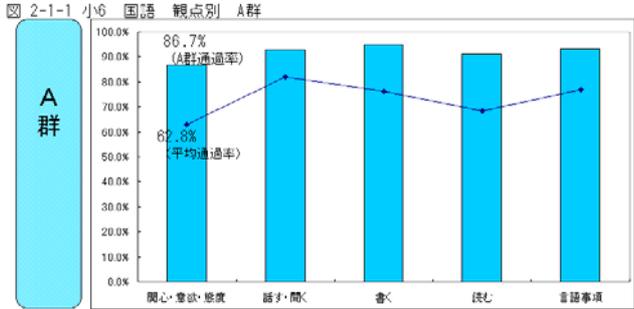
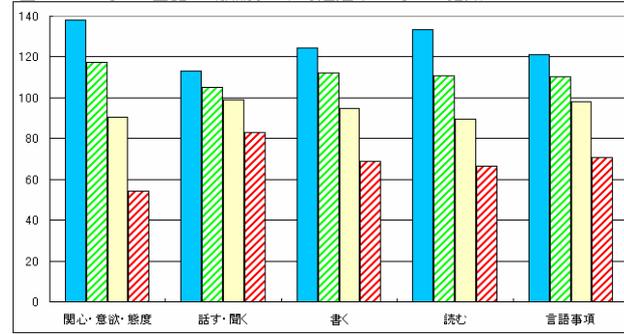


図 2-1-6 は、「小 6 国語 観点別 平均通過率に対する指数」(以下、「平均通過率に対する指数」と略して表記する)をグラフ化したものである。

図 2-1-6 小 6 国語 観点別 平均通過率に対する指数



小 6 国語 観点別 平均通過率に対する指数					
観点	関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語事項
A群	138.1	113.1	124.6	133.3	121.2
B群	117.4	105.2	112.0	110.8	110.2
C群	90.5	98.9	94.7	89.7	98.1
D群	54.2	82.8	68.8	66.3	70.5

平均通過率と同じ通過率であれば、100p になり、各群でその基準とどのくらい離れているのか、観点ごとに、課題を明らかにすることができると考える。これをみると、前述した内容と同様に「関心・意欲・態度」「読む」観点において、各群に差がみられる。

さらに、100p に注目すると以下の点が明らかになる。

- ・「話す・聞く」観点では、各群を比べると大きな差は見られない。しかし、ABC 群がほぼ 100p 以上であるのに対し、D 群だけがポイントが低い。
- ・同様に「言語事項」においても、「話す・聞く」の観点に次いで各群の差は小さい。しかし、ABC 群がほぼ 100p 以上であるのに対し、D 群だけが他の群と比べ、ポイントが低い。
- ・「書く」観点においても、ABC 群と D 群との格差を、グラフ上から読み取ることができる。

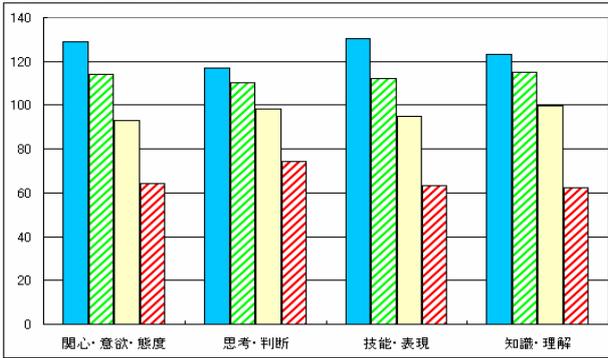
以上のように、「平均通過率に対する指数」を用いて各群の比較をしたときに、「通過率の平均」だけではみえてこなかった課題が明らかになってきた。特に各群の比較をしたときに、「全体に差が生じている観点」だけでなく、「D 群だけにみられる顕著な格差」が明らかになった。このことは、授業改善を進めるために、どの観点やどの領域に力点をおくべきなのか、またどの群の子どもたちに焦点をあてて指導を進めるのかを示唆する視点になると考える。

そこで、以下の分析にあたっては、「平均通過率に対する指数」を中心に、学力実態の現状について述べる。

(2) 社会

図 2-2 は、「小6 社会 観点別」のグラフである。

図 2-2 小6 社会 観点別



小6 社会 観点別				
	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
A群	129.1	117.0	130.3	123.0
B群	114.1	110.4	112.0	115.0
C群	92.9	98.3	94.7	99.7
D群	64.0	74.3	63.1	62.3

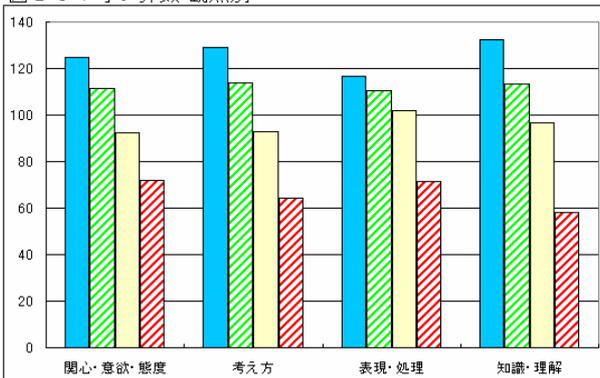
特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「関心・意欲・態度」「技能・表現」「知識・理解」の観点で大きな差がある。A群とD群とのポイントを比較すると、3観点とも、およそ2倍の開きがある。
- ・「思考・判断」「知識・理解」の観点では、ABC群とD群との格差を、グラフ上から読み取ることができる。

(3) 算数

図 2-3-1 は、「小6 算数 観点別」のグラフである。

図 2-3-1 小6 算数 観点別



小6 算数 観点別				
	関心・意欲・態度	考え方	表現・処理	知識・理解
A群	124.9	128.9	116.6	132.3
B群	111.3	113.8	110.6	113.2
C群	92.1	92.9	101.7	96.5
D群	71.8	64.5	71.2	58.2

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

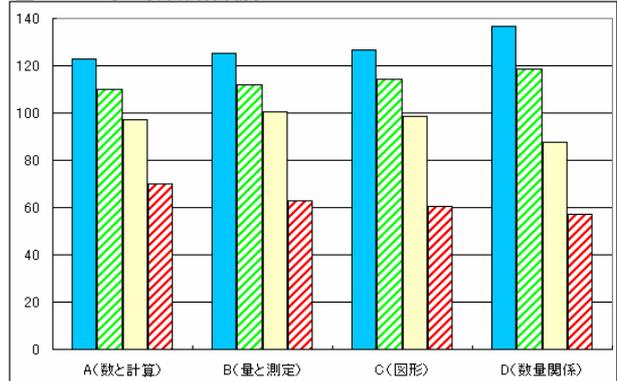
- ・「知識・理解」の観点で最も差が大きい格差がみられる。この観点では、A群とD群とのポイント

トを比較すると、74.1pの差がある。

- ・「表現・処理」の観点では、D群のポイントだけが100pを下回っており、ABC群とD群との格差がみられる。また、「知識・理解」の観点においても、D群だけがABC群と比べ、低いポイントとなっている。

図 2-3-2 は、「小6 算数 領域別」のグラフである。

図 2-3-2 小6 算数 領域別



小6 算数 領域別				
	A(数と計算)	B(量と測定)	C(図形)	D(数量関係)
A群	123.0	125.1	126.5	136.8
B群	110.1	111.7	114.5	118.8
C群	97.0	100.6	98.8	87.5
D群	70.0	62.7	60.3	57.0

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

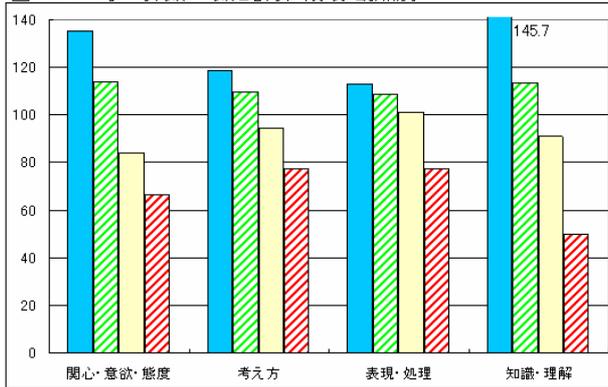
- ・「D(数量関係)」の領域で、最も大きい格差がみられる。この領域では、A群とD群とのポイントを比較すると、79.8pの差がある。
- ・「B(量と測定)」「C(図形)」領域では、A群とD群とのポイントを比較すると、両観点ともおよそ2倍の差がある。
- ・「A(数と計算)」「B(量と測定)」「C(図形)」領域では、ABC群とD群との格差をグラフ上から読み取ることができる。

以上のように、「観点別」「領域別」にみたときに、「全体として格差が生じていること」や「ABC群とD群との二つの群でみたときに、格差が存在すること」が明らかになってきた。

それでは、それぞれの領域において、観点別に学力を分析したときに、どのような姿がみえてくるのであろうか。次頁では、小6算数の4つの領域それぞれについて、観点別に平均通過率に対する指数を算出し、グラフ化した図を示す。

次頁図 2-3-3 は、「小6 A(数と計算) 領域 観点別」のグラフである。特徴的な内容として以下のことがあげられる。

図 2-3-3 小6 算数 A(数と計算)領域 観点別

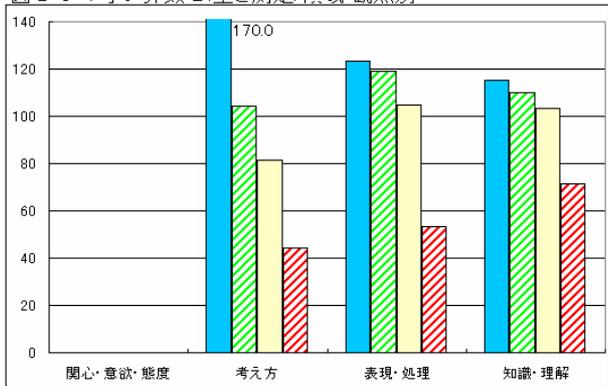


小6 算数 A(数と計算)領域 観点別				
	関心・意欲・態度	考え方	表現・処理	知識・理解
A群	135.4	118.6	112.9	145.7
B群	113.9	109.6	108.5	113.5
C群	84.2	94.6	101.1	91.4
D群	66.6	77.3	77.5	49.6

- 「関心・意欲・態度」「知識・理解」の観点で差が大きい。特に「知識・理解」の観点では、A群とD群とのポイントを比較すると、およそ3倍の開きがある。
- 「表現・処理」の観点では、全体の格差は他に比べると小さいが、ABC群とD群との格差を、読み取ることができる。

図 2-3-4 は、「小6 B(量と測定)領域 観点別」のグラフである。

図 2-3-4 小6 算数 B(量と測定)領域 観点別



小6 算数 B(量と測定)領域 観点別				
	関心・意欲・態度	考え方	表現・処理	知識・理解
A群	170.0	123.2	115.5	115.5
B群	104.5	118.9	110.0	110.0
C群	81.3	104.7	103.2	103.2
D群	44.5	53.3	71.4	71.4

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- 「考え方」の観点で大きな差がみられる。本観点におけるD群のポイントは44.5pであり、A群とD群とのポイントを比較すると、およそ4倍の差がある。
- 「表現・処理」「知識・理解」の観点では、ABC群とD群との格差を、読み取ることができる。

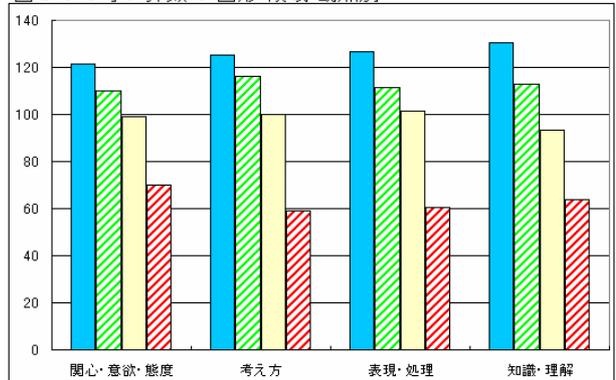
特に「表現・処理」観点のD群のポイントは、53.3pでありC群のおよそ半分である。

図 2-3-5 は、「小6 C(図形)領域 観点別」のグラフである。

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- 「考え方」「表現・処理」の観点ではABC群とD群との格差を、読み取ることができる。「関心・意欲・態度」「知識・理解」についても同様の傾向がみられる。
- 4観点ともA群とD群とのポイントを比べると、およそ2倍の差がある。

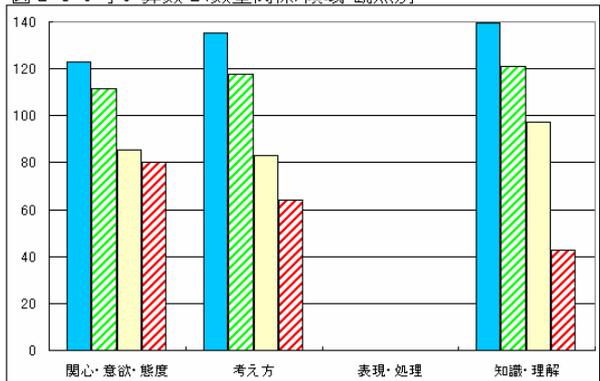
図 2-3-5 小6 算数 C(図形)領域 観点別



小6 算数 C(図形)領域 観点別				
	関心・意欲・態度	考え方	表現・処理	知識・理解
A群	121.3	125.1	126.7	130.6
B群	109.9	116.1	111.4	112.7
C群	99.1	99.8	101.4	93.2
D群	69.8	59.1	60.7	63.7

図 2-3-6 は、「小6 D(数量関係)領域 観点別」のグラフである。

図 2-3-6 小6 算数 D(数量関係)領域 観点別



小6 算数 D(数量関係)領域 観点別				
	関心・意欲・態度	考え方	表現・処理	知識・理解
A群	122.8	135.5	139.6	139.6
B群	111.5	117.8	120.9	120.9
C群	85.3	82.9	97.1	97.1
D群	80.4	64.0	42.6	42.6

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- 「知識・理解」の観点で最も大きい格差がみられ

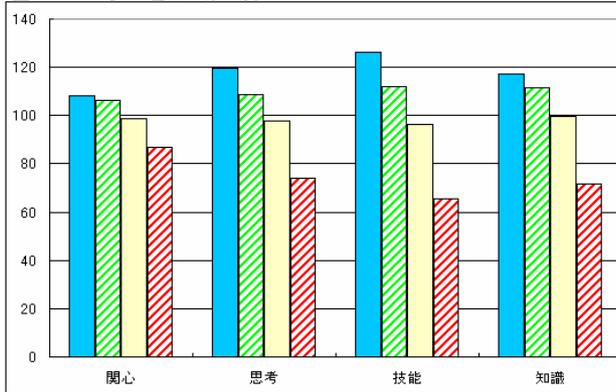
る。この観点におけるABC群とD群との差は97.0pあり、およそ3.27倍の差がある。

- ・「関心・意欲・態度」「考え方」の観点では、AB群とCD群という二つの群に分かれる傾向をみることができる。
- ・「知識・理解」の観点では、ABC群とD群との格差を、読み取ることができる。

(4) 理科

図2-4-1は、「小6 理科 観点別」のグラフである。

図2-4-1 小6 理科 観点別



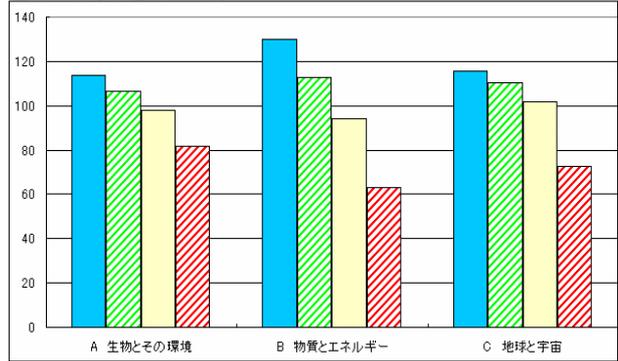
特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「関心」の観点では、ABCD群の格差が小さい。
- ・「技能」の観点で最も大きな格差がみられる。D群のポイントは65.6pであり、A群のポイントはおよそ2倍の126.4pである。
- ・「思考」「技能」「知識」の観点ではABC群とD群という二つの群に分かれる傾向をみることができる。
- ・4観点とも共通していることは、ABC群はほぼ100pであるのに対し、D群だけが、100pからは少し低いポイントを示していることである。

図2-4-2は、「小6 理科 領域別」のグラフである。特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「A 生物とその環境」領域では、ABCD群の格差が小さい。一方、最も格差が大きいのは「B 物質とエネルギー」の領域である。
- ・「A 生物とその環境」「C 地球と宇宙」の領域では、ABC群とD群という二つの群に分かれる傾向をみることができる。

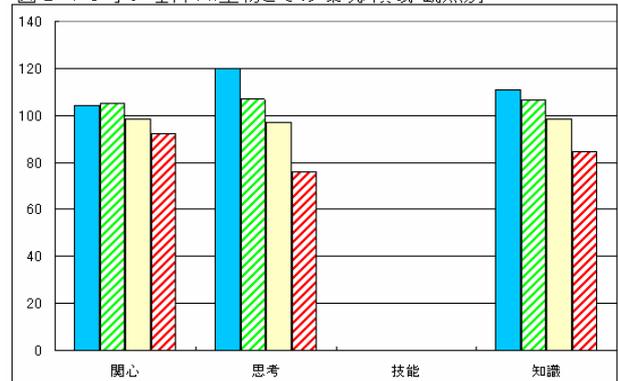
図2-4-2 小6 理科 領域別



小6 理科 領域別			
	A 生物とその環境	B 物質とエネルギー	C 地球と宇宙
A群	113.6	129.9	115.8
B群	106.8	112.9	110.2
C群	97.9	94.2	101.6
D群	81.8	63.1	72.5

図2-4-3は、「小6 A(生物とその環境) 領域 観点別」のグラフである。

図2-4-3 小6 理科 A(生物とその環境)領域 観点別



小6 理科 A(生物とその環境)領域 観点別				
	関心	思考	技能	知識
A群	104.3	119.8	110.7	117.3
B群	104.9	107.1	106.6	111.3
C群	98.4	97.1	98.3	99.8
D群	92.4	76.1	84.4	71.7

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

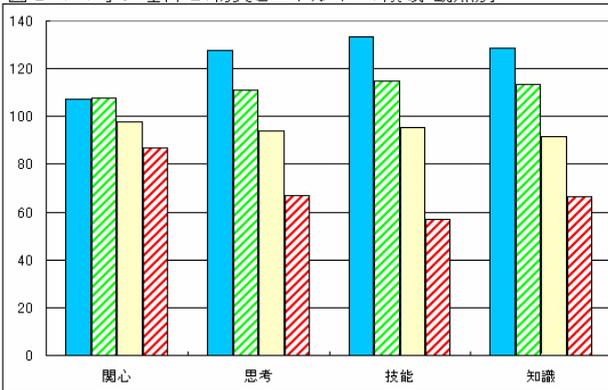
- ・全体をみると、各群の格差は比較的小さい。その中で、最も格差が大きいといえるのは「思考」の観点である。
- ・各群の格差は比較的小さいが、「思考」「知識」の観点で格差がみられる。

次頁図2-4-4は、「小6 B(物質とエネルギー) 領域 観点別」のグラフである。

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「関心」の観点では、格差は小さい。
- ・「技能」「思考」「知識」の観点で、大きい差がみられる。「技能」の観点では、ABC群とD群との格差がみられる。また、D群のポイントで一番低いのは、「技能」の観点である。

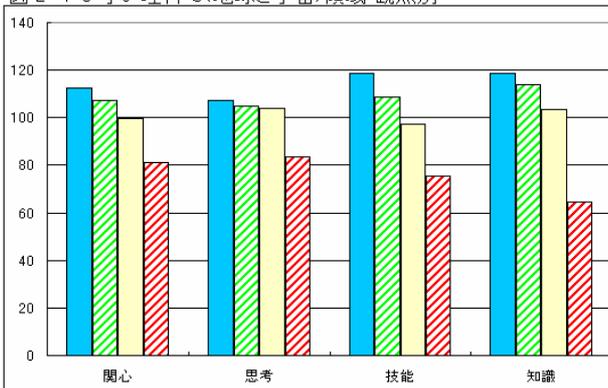
図 2-4-4 小6 理科 B(物質とエネルギー)領域 観点別



小6 理科 B(物質とエネルギー)領域 観点別				
	関心	思考	技能	知識
A群	107.4	127.7	133.3	128.4
B群	107.9	111.2	114.7	113.4
C群	98.0	94.1	95.2	91.7
D群	86.8	67.1	56.9	66.6

図 2-4-5 は、「小6 C (地球と宇宙) 領域 観点別」のグラフである。

図 2-4-5 小6 理科 C(地球と宇宙)領域 観点別



小6 理科 C(地球と宇宙)領域 観点別				
	関心	思考	技能	知識
A群	112.2	107.5	118.7	118.5
B群	107.3	105.0	108.9	113.9
C群	99.5	103.8	97.1	103.3
D群	81.0	83.7	75.4	64.3

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「関心」「思考」の観点では大きな格差はみられない。
- ・全観点到わたって共通することは、ABC 群と D 群という二つの群に分かれる傾向がみられることである。
- ・また、全観点到わたって ABC 群は、ほぼ 100p 以上のポイントを示しているが、D 群に着目したとき、D 群だけが 100p を大きく下回る結果となっている。
- ・特に「知識」の観点では、D 群のポイントは、54.3p であり、ABC 群との格差が最も顕著に表れている。

< 概括 1 > 小学校「学力定着調査」の結果から

小学校「学力定着調査」の結果を分析した結果、以下の二つの視点からみた格差が浮かび上がってきた。学力向上にむけて授業改善を進める際に、留意しなければならない領域・観点、また、特に D 群の児童に焦点をあてる必要がある領域・観点として概括する。

○全体に大きい格差がみられた教科の領域・観点

- <国語> 「関心・意欲・態度」「読む」
- <社会> 「関心・意欲・態度」「技能・表現」「知識・理解」
- <算数>
 - ・「数と計算」領域の「関心・意欲・態度」「知識・理解」
 - ・「量と測定」領域の「考え方」
 - ・「図形」領域の「考え方」「表現・処理」「知識・理解」
 - ・「数量関係」領域の「考え方」「知識・理解」
- <理科>
 - ・「生物とその環境」領域の「思考」
 - ・「物質とエネルギー」領域の「技能」「知識」
 - ・「地球と宇宙」領域の「知識」

○学力階層別にみたときに、ABC 群と D 群との間に格差がみられた教科の領域・観点

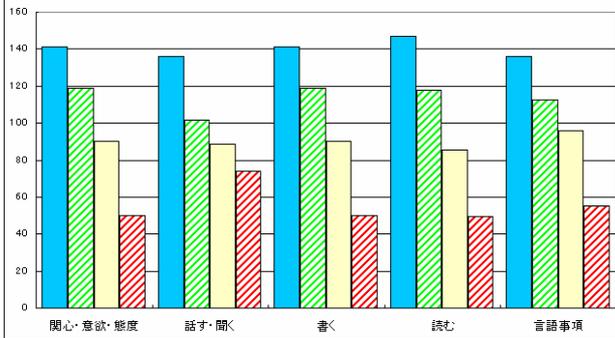
- <国語> 「話す・聞く」「書く」「言語事項」
- <社会> 「思考・判断」「知識・理解」
- <算数>
 - ・「数と計算」領域の「知識・理解」「表現・処理」
 - ・「量と測定」領域の「表現・処理」「知識・理解」
 - ・「図形」領域の「関心・意欲・態度」「表現・処理」「考え方」
 - ・「数量関係」領域の「知識・理解」
- <理科>
 - ・「物質とエネルギー」領域の「技能」
 - ・「地球と宇宙」の領域 全観点

第2節 中学校学力定着調査の結果から

(1) 国語

図 2-5 は、「中3 国語 観点別」のグラフである。

図 2-5 中3 国語 観点別



特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「話す・聞く」の観点では、A群とBCD群との格差がみられる。
- ・「読む」の観点は、A群とD群の格差が最も大きくおよそ3倍の差がある。
- ・表 2-2 は、中3のA群とD群との指数を比較したものである。ここでは、「A群はD群の何倍になっているか」について算出した。なお、小6についても中3と比較するために同様に算出した結果を示した。

表 2-2 小6・中3国語 A群とD群とのポイントの比較

<A群のポイント÷D群のポイント> (倍)

観点 学年	関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語事項
小6	2.55	1.37	1.81	2.01	1.72
中3	2.82	1.84	2.82	2.98	2.46

小6から中3への経年変化としてとらえるならば、学年進行に伴ってA群とD群との格差が大きくなったと考えられる。

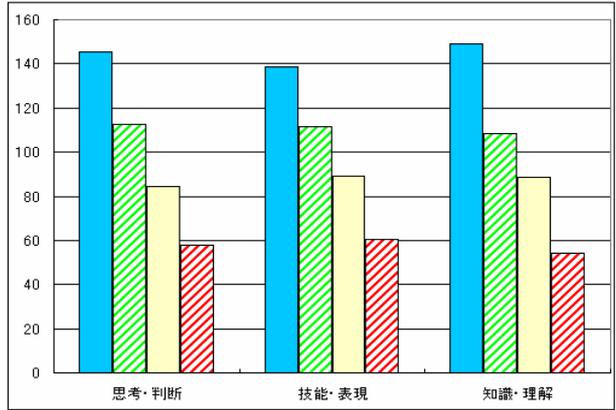
(2) 社会

図 2-6-1 は、「中3 社会 観点別」のグラフである。

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・D群のポイントが最も低いのは「知識・理解」の観点である。
- ・「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」のA群とD群のポイントと比較すると、それぞれの

図 2-6-1 中3 社会 観点別

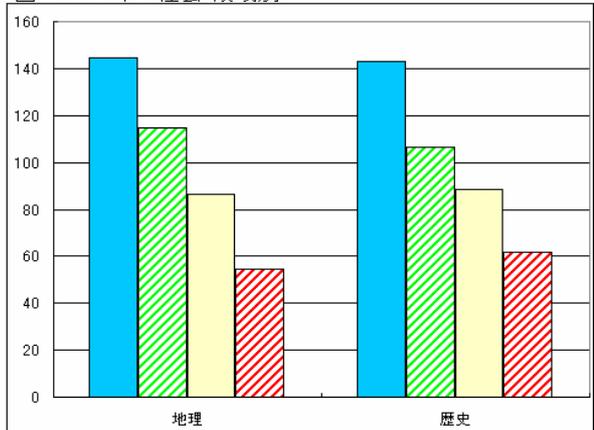


観点で、2.51倍、2.29倍、2.75倍の差がある。

- ・前述 図 2-2 「小6 社会 観点別」では、「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」のA群とD群のポイントと比較すると、1.57倍、2.06倍、1.97倍である。小6から中3への経年変化としてとらえるならば、学年進行に伴ってA群とD群との格差が大きくなったと考えられる。

図 2-6-2 は、「中3 社会 領域別」のグラフである。

図 2-6-2 中3 社会 領域別

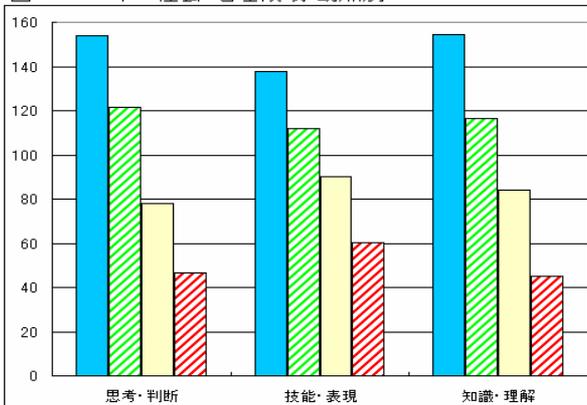


特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・A群とD群のポイントと比較すると、「地理」の領域で2.66倍、「歴史」の領域では2.32倍の差がある。「歴史」の領域ではA群とB群とのポイントの差が36.3pあり、他の群同士の差と比較しても大きな差がある。

図 2-6-3 は、「中 3 社会 地理領域 観点別」のグラフである。

図 2-6-3 中3 社会 地理領域 観点別

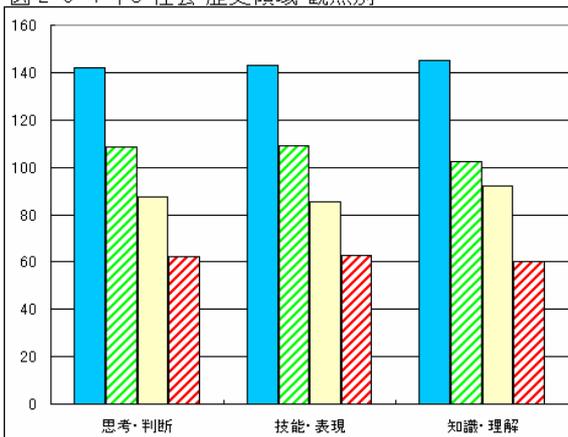


特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「知識・理解」の観点で最も差が大きい。次いで差が大きいのは「知識・理解」の観点であり、3.42 倍の差がある。続いて差が大きいのは、「思考・判断」の観点で、3.32 倍の差がある。
- ・「技能・表現」の観点は、他の観点と比べると最も差が小さいが、A 群と D 群のポイントを比較すると、2.29 倍の差がある。

図 2-6-4 は、「中 3 社会 歴史領域 観点別」のグラフである。

図 2-6-4 中3 社会 歴史領域 観点別



特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「知識・理解」の観点では、A 群と D 群とのポイントを比較すると、2.40 倍の差がある。

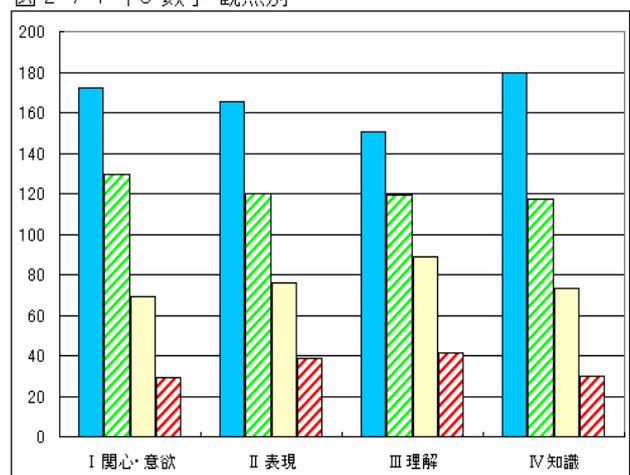
・「知識・理解」の観点では、A 群と B 群の差が 42.6p あるのに対し、B, C 群の差は 10.2p であり、A 群と BC 群と D 群の 3 群に分かれる傾向がみられる。

(3) 数学

今回の学力定着調査分析を進めるなかで、中 3 数学の結果からは、全体の格差の広がりや観点別にみた A 群と D 群の格差が、最も顕著にみられた。

図 2-7-1 は、「中 3 数学 観点別」のグラフである。

図 2-7-1 中3 数学 観点別

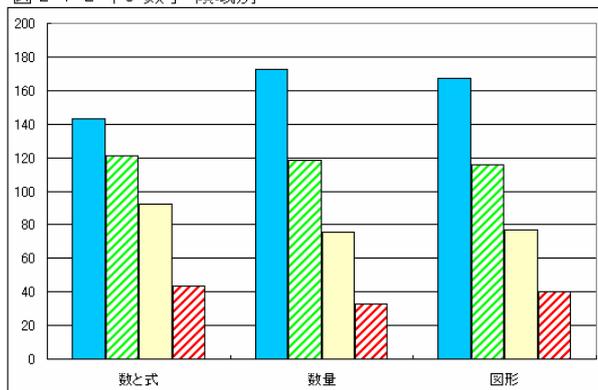


特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・すべての観点において、大きな格差がみられる。最も大きい差を示しているのは、「IV 知識」の観点であり、A 群と D 群のポイントを比較すると、6.03 倍の差がある。
- ・全観点において D 群のポイントが低く、最も高い「III 理解」の観点においても、41.3p である。
- ・前述図 2-3-1 「小 6 算数 観点別」の「関心・意欲・態度」「知識・理解」の観点では、A 群と D 群との差はそれぞれ 1.74 倍、2.27 倍である。「関心・意欲・態度」「知識・理解」の観点で中 3 の結果と比較したとき、A 群と D 群との差はそれぞれ 5.90 倍、6.03 倍である。小 6 から中 3 への経年変化としてとらえるならば、学年進行に伴って A 群と D 群との格差が大きくなったと考えられる。

図 2-7-2 は、「中3 数学 領域別」のグラフである。

図 2-7-2 中3 数学 領域別



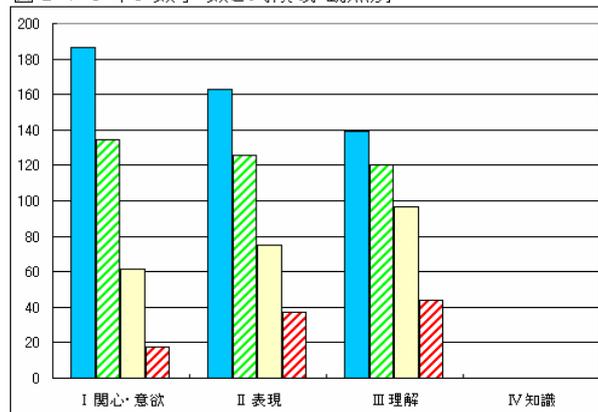
中3 数学 領域別			
	数と式	数量	図形
A群	143.1	172.7	167.2
B群	121.2	118.5	115.5
C群	92.2	75.9	77.1
D群	43.5	32.9	40.2

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・3 領域すべての観点において、A～D 群のポイントで大きな格差がみられる。
- ・3 領域すべての観点においてD 群のポイントが低い。最も低いポイントを示しているのは「数量」の領域では32.9p である。

図 2-7-3 は、「中3 数学 数と式領域 観点別」のグラフである。

図 2-7-3 中3 数学 数と式領域 観点別



中3 数学 数と式領域 観点別				
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	186.8	162.6	139.1	139.1
B群	134.2	125.5	120.3	120.3
C群	61.7	75.1	96.4	96.4
D群	17.3	36.9	44.3	44.3

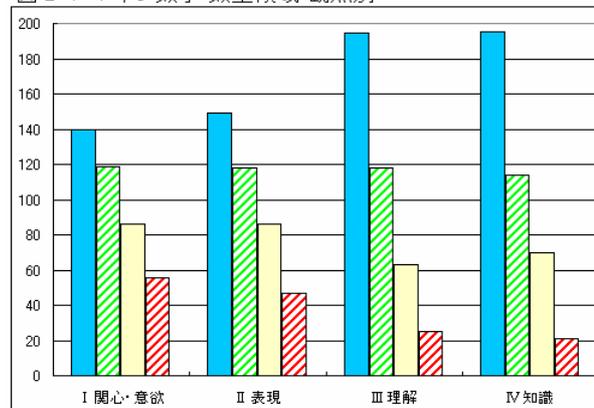
特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・すべての観点において、A～D 群のポイントで大きな格差がみられる。最も大きい格差を示しているのは、「I 関心・意欲」の観点であり、A 群とD 群のポイントと比較すると、10.80 倍の差がある。
- ・全観点においてD 群のポイントが低い。

・「III 理解」の観点では、ABC 群とD 群との格差がみられる。

図 2-7-4 は、「中3 数学 数量領域 観点別」のグラフである。

図 2-7-4 中3 数学 数量領域 観点別



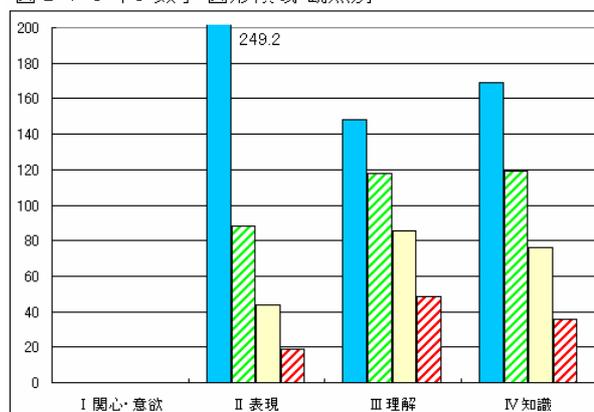
中3 数学 数量領域 観点別				
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	139.7	148.9	194.4	195.0
B群	118.5	118.2	117.9	114.0
C群	86.1	86.1	62.8	69.9
D群	55.7	46.8	24.9	21.0

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・すべての観点において、A～D 群のポイントで大きな格差がみられる。特に大きい格差を示しているのは、「III 理解」「IV 知識」の観点である。
- ・全観点において、D 群のポイントが低い。特に「III 理解」「IV 知識」の観点では、それぞれのポイントが24.9p と21.0p である。
- ・「III 理解」「IV 知識」の観点ではC 群のポイントも他の観点に比べて低い。

図 2-7-5 は、「中3 数学 図形領域 観点別」のグラフである。

図 2-7-5 中3 数学 図形領域 観点別



中3 数学 図形領域 観点別				
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	249.2	148.0	169.2	169.2
B群	88.1	117.5	119.2	119.2
C群	44.0	85.7	75.8	75.8
D群	18.7	48.7	48.7	35.7

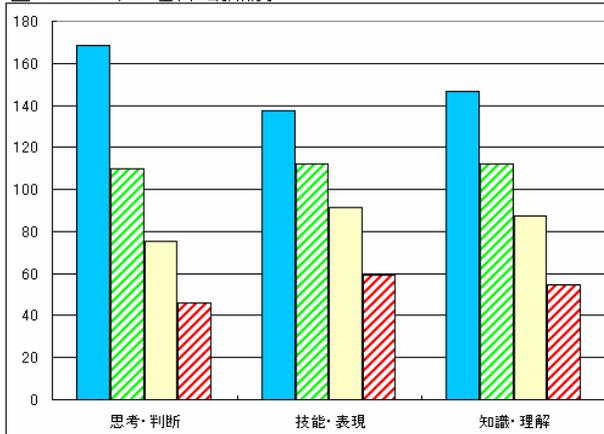
特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- すべての観点において、A～D群のポイントで大きな格差がみられる。特に大きい格差を示しているのは、「Ⅱ表現」の観点である。
- 「Ⅱ表現」の観点で、A群とD群のポイントを比較すると、13.32倍の差がある。
- 「Ⅱ表現」の観点ではA群だけが100pを越えており、BCD群は100p以下の数値を示している。

(4) 理科

図 2-8-1 は、「中3 理科 観点別」のグラフである。

図 2-8-1 中3 理科 観点別



	中3 理科 観点別		
	思考・判断	技能・表現	知識・理解
A群	168.8	137.4	146.4
B群	109.9	112.4	111.9
C群	75.3	91.2	87.2
D群	46.0	58.9	54.4

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

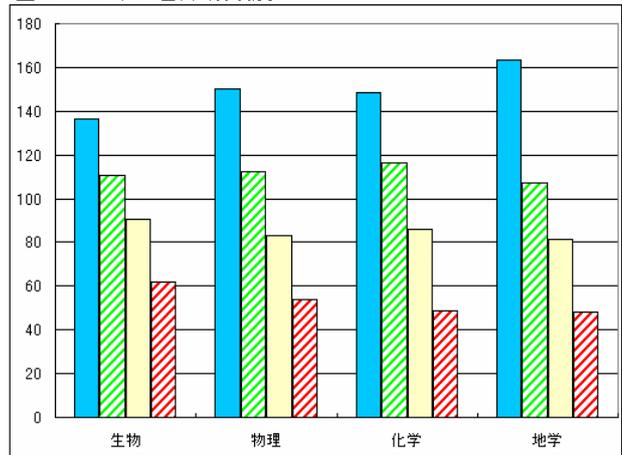
- 最も大きい差を示しているのは、「思考・判断」の観点である。A群とD群のポイントを比較すると、3.67倍の差がある。また「知識・理解」の観点においても、2.69倍の差がみられる。
- 前述図 2-4-1「小6 理科 観点別」の「思考」「技能」「知識」の観点では、A群とD群との差はそれぞれ1.62倍、1.93倍、1.63倍である。「思考」「技能」「知識」の観点で中3と比較したとき、A群とD群との差はそれぞれ3.67倍、2.33倍、2.69倍である。小6から中3への経年変化としてとらえるならば、学年進行に伴ってA群とD群との格差が大きくなったと考えられる。

図 2-8-2 は、「中3 理科 領域別」のグラフである。

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- 最も大きい差を示しているのは、「地学」の領域である。A群とD群のポイントを比較すると、

図 2-8-2 中3 理科 領域別



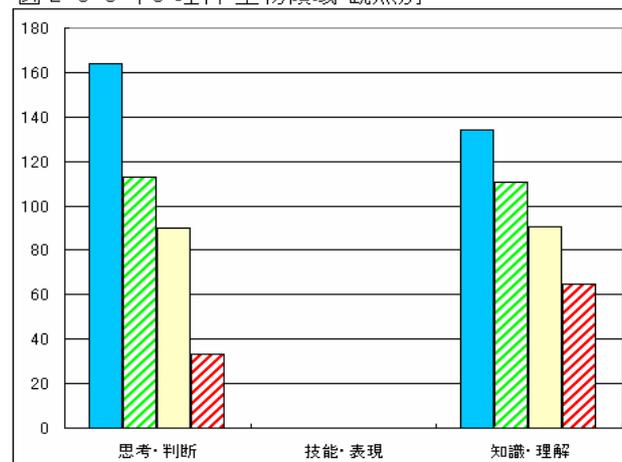
	中3 理科 領域別			
	生物	物理	化学	地学
A群	136.7	150.1	148.7	163.2
B群	110.6	112.6	116.5	107.1
C群	90.7	83.3	86.1	81.3
D群	62.0	54.0	48.7	48.3

3.38倍の差がある。次いで差が大きいのは、「化学」の領域であり、「物理」「生物」と続く。

- 「地学」の領域では、A群とBCD群との間に格差がみられる。また、A群とD群を比較するとその差は、3.38倍の差がある。前述図 2-4-2「小6 理科 領域別」のグラフでは「C 地球と宇宙」の領域で、ABC群とD群という二つの群に別れる傾向をみる事ができた。地学に関する領域で小6・中3のD群のポイントが低いことが共通の課題としてあげられる。

図 2-8-3 は、「中3 理科 生物領域 観点別」のグラフである。

図 2-8-3 中3 理科 生物領域 観点別



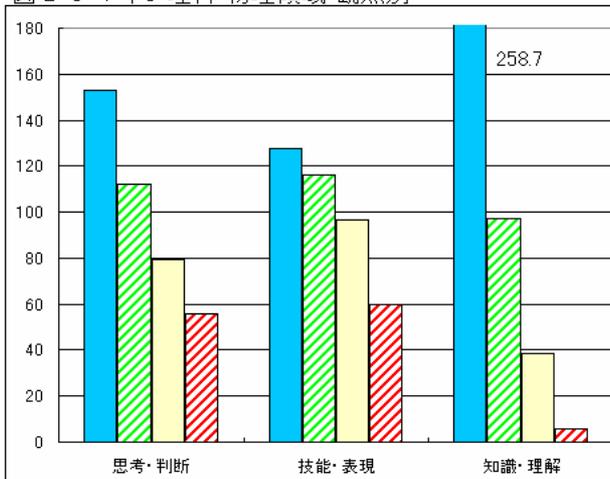
	中3 理科 生物領域 観点別		
	思考・判断	技能・表現	知識・理解
A群	164.0		134.0
B群	113.0		110.4
C群	90.0		90.8
D群	33.0		64.8

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「思考・判断」の観点ではA～D群のポイントで大きな差がみられる。A群は164.0pに対し、D群は33.0pであり、A群とD群のポイントを比較すると、4.97倍の差がある。
- ・「知識・理解」の観点では、「思考・判断」に比べると差は小さいが、A群とD群のポイントを比較すると、2.07倍の差がある。

図 2-8-4 は、「中3 理科 物理領域 観点別」のグラフである。

図 2-8-4 中3 理科 物理領域 観点別



中3 理科 物理領域 観点別			
	思考・判断	技能・表現	知識・理解
A群	153.0	127.4	258.7
B群	111.9	116.2	97.2
C群	79.1	96.5	38.5
D群	55.9	59.9	5.5

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

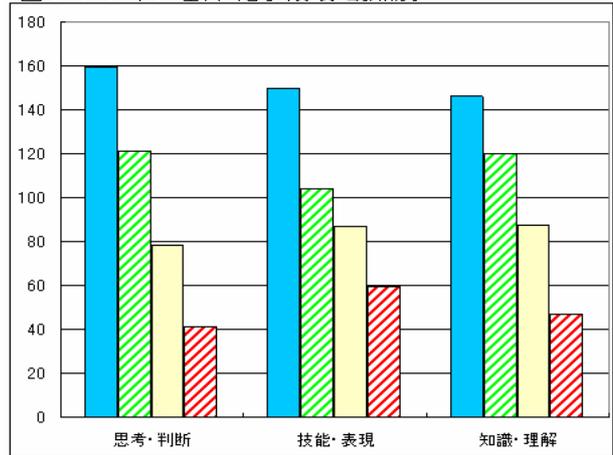
- ・「知識・理解」の観点が最も大きい差を示している。A群とD群とのポイントを比較すると、47.04倍の差がある。また、同観点ではC群のポイントも低く、A群とC群とのポイントを比較すると6.72倍の差がある。
- ・「技能・表現」の観点では、ABC群とD群との格差がみられる。

図 2-8-5 は、「中3 理科 化学領域 観点別」のグラフである。

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「思考・判断」の観点で最も大きい差を示している。A群とD群とのポイントを比較すると、3.86倍の差がある。D群で最も低いポイントを示しているのも、同観点である。
- ・「技能・表現」の観点では、A群とBCD群との格差がみられる。

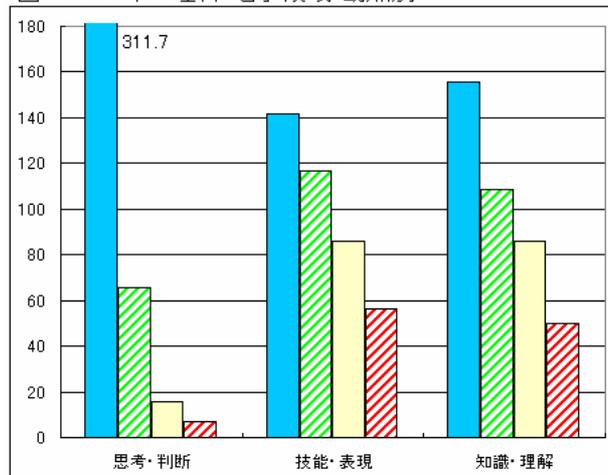
図 2-8-5 中3 理科 化学領域 観点別



中3 理科 化学領域 観点別			
	思考・判断	技能・表現	知識・理解
A群	159.2	150.0	146.1
B群	121.2	103.9	119.8
C群	78.4	86.9	87.5
D群	41.2	59.2	46.6

図 2-8-6 は、「中3 理科 地学領域 観点別」のグラフである。

図 2-8-6 中3 理科 地学領域 観点別



中3 理科 地学領域 観点別			
	思考・判断	技能・表現	知識・理解
A群	311.7	141.4	155.6
B群	65.8	116.5	108.7
C群	15.6	85.7	85.7
D群	6.9	56.4	50.1

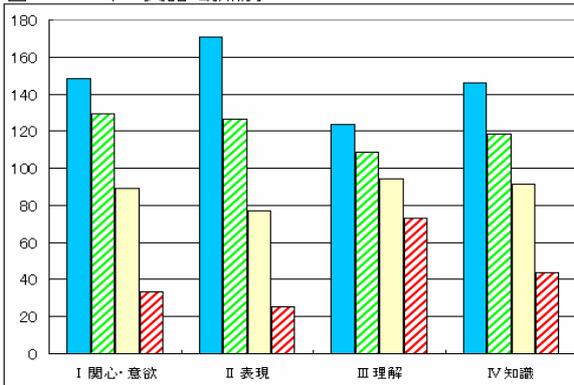
特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「思考・判断」の観点が最も格差が大きい。
- ・「思考・判断」の観点で、A群とD群とのポイントを比較すると、45.17倍の差がある。同観点では、CD群ともにポイントが低い。
- ・「知識・理解」の観点では、A群とD群のポイントを比較すると、3.11倍の差がある。小6「C 地球と宇宙」の領域の「知識」の観点でも、D群だけポイントが低かった。

(5) 英語

図 2-9-1 は、「中3 英語 観点別」のグラフである。

図 2-9-1 中3 英語 観点別

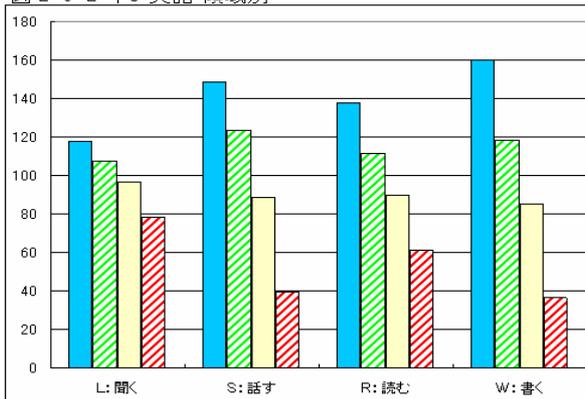


	観点別の通過率			
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	148.1	170.9	123.8	146.2
B群	129.3	126.5	108.8	118.5
C群	89.0	77.1	94.4	91.3
D群	33.6	25.5	73.0	44.0

- 特徴的な内容として以下のことがあげられる。
- ・「理解」の観点は他の観点に比べ、全体的に格差が小さい。
 - ・「II 表現」の観点で、最も大きい差を示している。A群とD群のポイントを比較すると、6.70倍の差がある。次に格差が大きいのは「I 関心・意欲」の観点であり、A群とD群のポイントを比較すると、4.41倍の差がある。

図 2-9-2 は、「中3 英語 領域別」のグラフである。

図 2-9-2 中3 英語 領域別



	領域別の通過率			
	L: 聞く	S: 話す	R: 読む	W: 書く
A群	117.9	148.8	137.5	160.0
B群	107.6	123.3	111.6	118.4
C群	96.4	88.4	89.8	85.0
D群	78.1	39.6	61.2	36.6

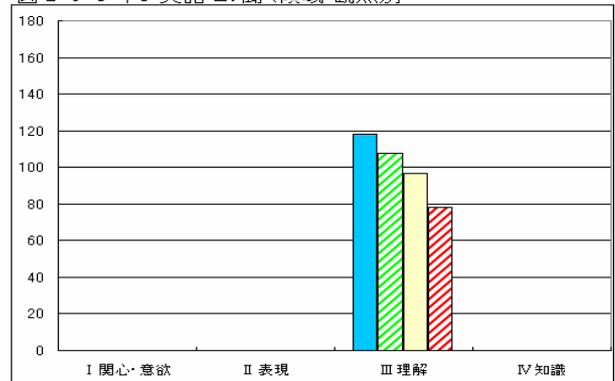
- 特徴的な内容として以下のことがあげられる。
- ・「L: 聞く」の観点は他の観点に比べ、全体的に格差が小さい。ただし、ABC群はほぼ100p以上であるのに対し、D群だけ80ポイントに届いて

いない。

- ・「W: 書く」の領域で、最も大きい差を示している。A群とD群のポイントを比較すると、4.37倍の差がある。次に差が大きいのは「S: 話す」の領域であり、A群とD群のポイントを比較すると、3.76倍の差がある。
- ・「S: 話す」「W: 書く」の領域では、C群のポイントが低く、それぞれ、39.6p, 36.6pである。

図 2-9-3 は、「中3 英語 L: 聞く領域 観点別」のグラフである。本領域では、他の領域と比して、大きな差はみられない。

図 2-9-3 中3 英語 L: 聞く領域 観点別

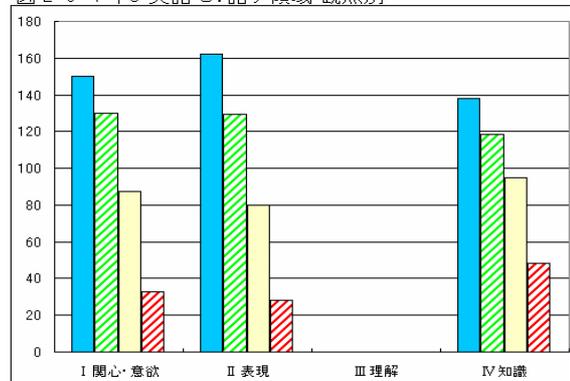


	中3 英語 L: 聞く領域 観点別			
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群			117.9	
B群			107.6	
C群			96.4	
D群			78.1	

図 2-9-4 は、「中3 英語 S: 話す領域 観点別」のグラフである。

- 特徴的な内容として以下のことがあげられる。
- ・「II 表現」の観点で最も大きい差を示している。
 - ・「I 関心・意欲」「II 表現」の観点ともD群のポイントが低く、それぞれ、32.6p, 28.4pである。

図 2-9-4 中3 英語 S: 話す領域 観点別

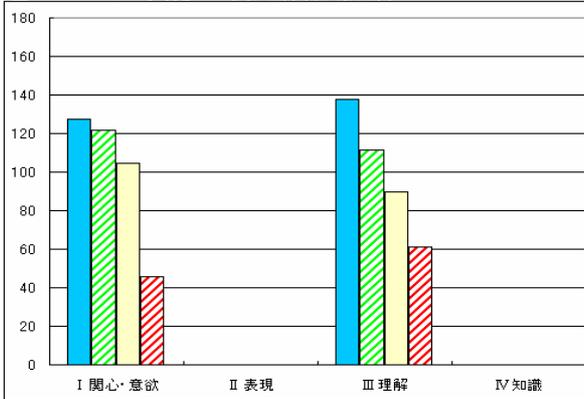


	中3 英語 S: 話す領域 観点別			
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	150.3	162.4		138.3
B群	129.7	129.3		118.5
C群	87.3	79.8		95.0
D群	32.6	28.4		48.2

- ・「IV知識」の観点では、ABC群はほぼ100p以上であるが、D群だけが48.2pであり、二つの群に分かれる傾向がみられる。

図2-9-5は、「中3英語R:読む領域 観点別」のグラフである。

図2-9-5 中3英語R:読む領域 観点別



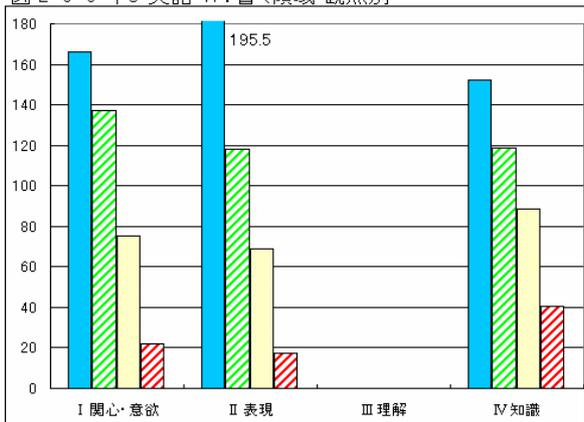
中3英語R:読む領域 観点別				
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	127.5		137.5	
B群	121.7		111.6	
C群	104.9		89.8	
D群	46.0		61.2	

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・「I 関心・意欲」の観点では、ABC群が100p以上であるのに対し、D群だけが46.0pである。C群とD群との差は、58.9pであり、ABC群とD群との二つの群に分かれる傾向がみられる。

図2-9-6は、「中3英語W:書く領域 観点別」のグラフである。

図2-9-6 中3英語W:書く領域 観点別



中3英語W:書く領域 観点別				
	I 関心・意欲	II 表現	III 理解	IV 知識
A群	165.9	195.5		152.5
B群	137.0	118.2		118.5
C群	75.1	69.1		88.4
D群	21.9	17.2		40.6

特徴的な内容として以下のことがあげられる。

- ・全観点において、A~D群のポイントで大きな格

差がみられる。特に「II表現」の観点では、その格差が最も大きい。

- ・「W:書く領域」において、D群は、3観点とも低いポイントを示している。

< 概要2 > 中学校「学力定着調査」の結果から

中学校「学力定着調査」の結果を分析した結果、以下の二つの視点からみた格差が浮かび上がってきた。特徴的な点について概括する。

○全体に大きい格差がみられた教科の領域・観点

< 国語 >

- ・「関心・意欲・態度」「書く」「読む」

< 社会 >

- ・地理領域の「知識・理解」「思考・判断」

< 数学 > 全領域でA群とD群との格差が大きい

< 理科 >

- ・「生物」領域の「思考・判断」
- ・「物理」領域の「思考・判断」「知識・理解」
- ・「化学」領域の「思考・判断」
- ・「地学」領域の「思考・判断」「知識・理解」

< 英語 >

- ・「話す」「書く」の領域
- ・「関心・意欲」「表現」「知識」

○学力階層別にみたときに、ABC群とD群との間に格差がみられた教科の領域及び観点

(特にD群のポイントが低かった観点も示す)

< 国語 >

- ・「関心・意欲・態度」「書く」「言語事項」

< 数学 >

- ・「数と式」領域の「関心・意欲」「表現」「理解」
- ・「数量」領域の「表現」「理解」「知識」
- ・「図形」領域の「表現」「理解」「知識」

< 理科 >

- ・「生物」領域の「思考・判断」
- ・「物理」領域の「技能・表現」「知識・理解」
- ・「化学」領域の「思考・判断」「知識・理解」
- ・「地学」領域の「思考・判断」

< 英語 >

- ・「話す」領域の「関心・意欲」「表現」「知識」
- ・「読む」領域の「関心・意欲」
- ・「書く」領域の「関心・意欲」「表現」「知識」

第3節 「学力定着調査」 分析のまとめ

「学力定着調査」の分析を進めたところ、どの領域・観点において通過率が低いのか、また格差があるのか、課題が明らかになってきた。

一つめの課題は、小6から中3にかけて、学力実態のばらつきが広がっていることである。国語・社会・算数(数学)・理科では、A群とD群との格差は、小6・中3の共通する観点で比較すると、小6よりも中3の方がその格差は大きくなっている。ABC群とD群との格差がみられた領域・観点は、小6よりも中3の方が数が多い。また、中3のD群の指数に着目すると、低いポイントを示す観点が多くあった。

もちろん、今回の調査対象である小6児童と中3生徒は同じ集団ではない。その意味では、「小6から中3にかけての学力の経年変化である」とは早急に結論づけるわけにはいかない。しかしながら、小6と中3との学力実態のばらつきを比べたときに、「中3の方がばらつきが広がっている」という事実は、学習指導を進める上で、D群に対する支援を大切にしなければならないという視点を示唆していると考えられる。

二つめは、「学習意欲」に課題があることである。

小6・中3において、総合計の通過率平均と、「関心・意欲」にかかわる観点の合計の通過率平均との相関係数を、表2-2に示した。これをみると、「関心・意欲」にかかわる内容と、学力全体との関連が高いことがわかる。

表2-2 総合計の通過率平均と、「関心・意欲」にかかわる観点の合計の通過率平均との相関係数

	相関係数
小6	0.688
中3	0.827

また、各教科の「関心・意欲」に関する観点に着目すると、全体あるいはABC群とD群との間に格差がみられた教科が多かった。

学ぶ意欲については、国際調査や国内調査の結果からも指摘があったとおりであり、京都市の児童生徒にも同じ課題があるといえる。

三つ目は、「表現」にかかわる観点で課題があることである。

全体に格差がみられた観点は、小6の社会「技能・表現」、中3の国語「書く」、数学「数と計算」

「量と測定」「図形」「数量関係」領域の「表現・処理」、英語「話す」「聞く」領域及び「表現」の観点である。また、ABC群とD群との間に格差がみられた観点は、小6では国語「話す・聞く」「書く」、算数「数と計算」「量と測定」「図形」領域の「表現・処理」、理科「地球と宇宙」の領域、中3では国語「話す・聞く」、数学「数と式」「図形」領域の「表現」、英語の「話す」「書く」領域の「表現」である。

自分の思いや考えを筋道立てて「表現」することは、思いを確かにしたたり、思考を深めたりしていくことにつながり、確かな学力を身につける上で大切にしたい観点である。しかし、ABC群とD群との格差を示す観点では、「書く」「話す」や「表現」にかかわる観点が数多くあった。

このことから、特に格差のみられたD群の子どもたちが「表現にかかわる」「表現を支える」力を身につけるために、具体的な方法や道筋を示す支援が必要であると考えられる。

第3章 「意識調査」の分析を通して

意識調査では、児童生徒の学校や家庭生活などに関する実態や、児童生徒およびその保護者の意識の傾向を調査した。

本章では、それぞれの設問について「全体の集計結果」と、A・B・C・D群の「学力階層別クロス集計の結果」とをグラフ化し、特徴的な結果を示したものを中心に分析・考察を進める。

なお、本章で取り上げる学力階層群は、小学校6年生は4教科合計、中学校3年生は5教科合計の総通過率を算出し、上位より25%ずつ階層化して、A・B・C・D群を設定している。

また、検定により有意水準を求め、有意差の判定を行った結果については、以下、「有意水準1%以内」を(**)、「有意水準5%以内」を(*)という形で示す。(21)

第1節 子どもたちの意識調査から

(1) 家庭生活

子どもたちは、日々の家庭生活をどのように送っているのだろうか。まず、基本的な生活習慣にかかわって、「朝食の摂取状況」「テレビなどの視聴時間の状況」から分析をする。

図3-1-1、図3-1-2は、小6・中3の《「学校のある日、朝食を食べますか」》の回答結果である。

図 3-1-1 小6 「学校のある日、朝食を食べますか」 (**)

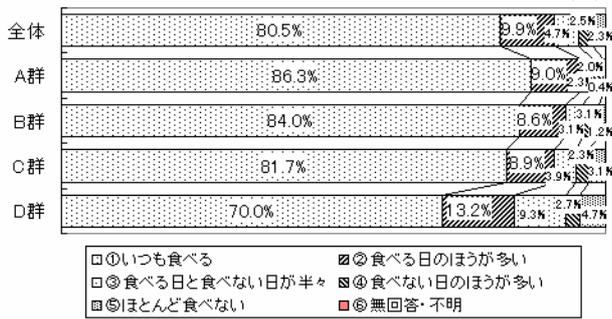
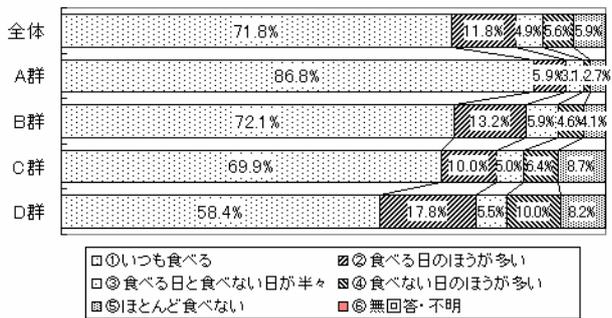


図 3-1-2 中3 「学校のある日、朝食を食べますか」 (**)



「いつも食べる」割合は、小6・中3とも、学力階層の下位群になるにつれて、少なくなる傾向を読み取ることができる。

小6・中3の「いつも食べる」と回答した割合をそれぞれ比較すると、A群とD群との間には格差があり、その差は有意(**)である。

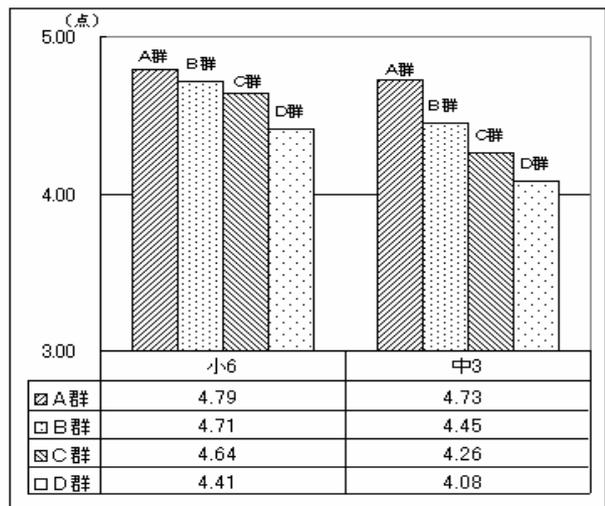
「食べない日の方が多い」「ほとんど食べない」と回答した割合に着目すると、全体では小6よりも中3の方がその割合が多く、学力階層別にみると、特に中3のC・D群で多い割合を示している。

次に、各群の「得点」を求めて比較する。これは、選択肢に配点をし、その回答結果から各群の平均値を求めて各群を簡便に比較するものである。ここでは、朝食をいつも規則正しく食べていると回答した場合に高い得点を配当し、比較できるようにした。各選択肢への配点を表3-1に示す。また、小6・中3各群の得点を算出し、グラフ化した結果を図3-1-3に示す。

表 3-1 「朝食の摂取状況」 選択肢への配点

選択肢	配点
① いつも食べる	5点
② 食べる日のほうが多い	4点
③ 食べる日と食べない日が半々	3点
④ 食べない日の方が多い	2点
⑤ ほとんど食べない	1点
⑥ 無回答・不明	0点

図 3-1-3 「朝食の摂取状況」 各群の得点



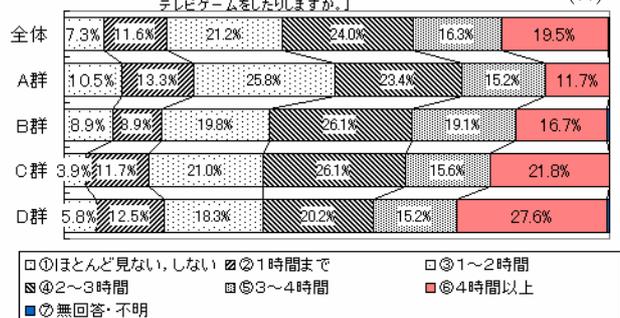
これをみると、「朝食の摂取状況」の各群の得点は、小6・中3とも、学力階層の上位群ほど、高くなっていることがわかる。また、小6と中3の各群の結果を比べてみると、中3の方が得点は低い傾向にあり、そのなかでも中3D群が最も低い得点であった。

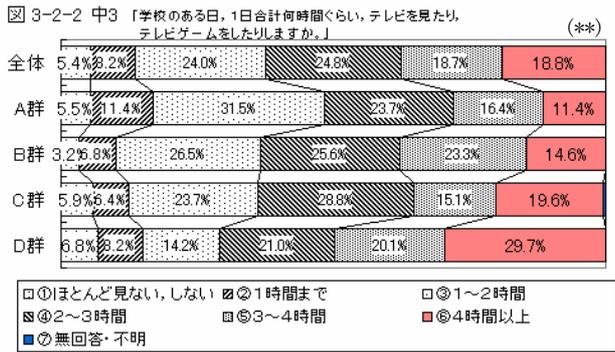
朝食の摂取状況についての回答結果を学力階層別にみたときに、A群とD群との間には有意な格差がみられた。また、各群の「得点」を求めて比較すると、学力階層の上位群ほど得点は高く、その傾向は小中共通したものであった。

このことは、「朝食を食べる」という基本的な生活習慣の一側面を見直すことが、児童生徒の学力を支えていくために、今一度見直さなければならぬ大切な視点であることを示唆するものであると考える。

図3-2-1、次頁図3-2-2は、小6・中3の《「学校のある日、1日合計何時間ぐらい、テレビを見たり、テレビゲームをしたりしますか」》の回答結果である。

図 3-2-1 小6 「学校のある日、1日合計何時間ぐらい、テレビを見たり、テレビゲームをしたりしますか。」 (**)





テレビ視聴やテレビゲームにかかわる時間は、学力階層の下位群になるにつれて、多くなる傾向を読み取ることができる。

「4 時間以上」と回答した割合に着目すると、小6・中3ともA群よりもD群の方が多く、その格差は有意(**)である。

「3~4 時間」「4 時間以上」と回答した群に注目すると、中3のD群では、その合計が、49.8%になる。このことは、中3 D群の生徒が、およそ二人に一人の割合で、3 時間以上、テレビ画面にむかっている実態があるととらえることができる。

次に、各群の「得点」を求めて比較する。ここでは、テレビなどの視聴時間が「短い」と回答した場合ほど高い得点を配当し、各群の平均値を求めて簡便に比較できるようにした。各選択肢への配点を表 3-2 に示す。

表 3-2 「テレビなどの視聴時間の状況」 選択肢への配点

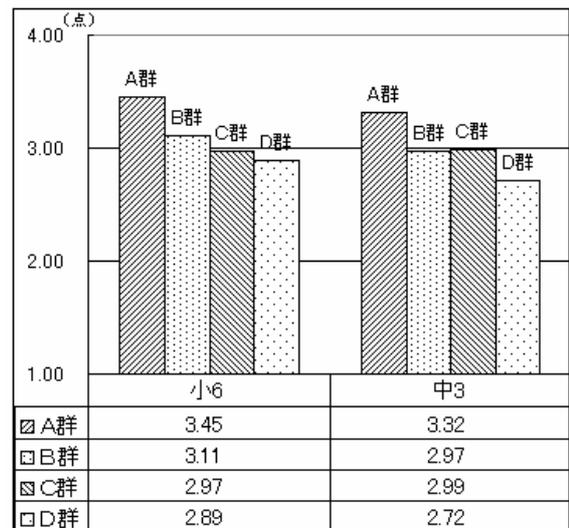
選択肢	配点
① ほとんど見ない, しない	6 点
② 1 時間まで	5 点
③ 1~2 時間	4 点
④ 2~3 時間	3 点
⑤ 3~4 時間	2 点
⑥ 4 時間以上	1 点
⑦ 無回答・不明	0 点

また、小6・中3各群の得点を算出し、グラフ化した結果を図 3-2-3 に示す。

上記表 3-2 のように、各選択肢に配点をした結果、本設問における各群の得点は、小6・中3とも、学力階層の下位群ほど低くなっていることがわかる。

児童生徒は、帰宅後、どのようなことに時間を費やして、日々の生活を送っているのだろうか。テレビの視聴やゲームに興じるだけでなく、机にむかって学習をしたり、外に出て遊んだり、

図 3-2-3 「テレビなどの視聴時間の状況」 各群の得点



家族と話し合ったりするなど、様々な時間の使い方があはざるはずである。D 群の児童生徒は、多くの時間をテレビにむかうことに費やし、人とコミュニケーションを十分にとる時間すら少なくなっていることが予想される。家庭での日々の時間の使い方や過ごし方について見直す必要があるという視点を示唆する結果となった。

(2) 家庭学習

子どもたちの家庭での学習状況はどのようなになっているのだろうか。本項ではまず、「家庭学習の時間」の回答結果から分析をする。そして次に、家の人とのかかわりの中で、読み聞かせの経験や自然体験がどのような状況であったのかについて分析をする。

次頁図 3-3-1、図 3-3-2 は、小6・中3の《「学校のある日、どのくらい家で勉強していますか」》の回答結果である。

「2 時間以上」と回答した群に着目すると、小6・中3とも学力階層の上位群ほど多い。また「学習時間が短い」「ほとんどしない」と回答している割合は、小6・中3とも学力階層の下位群になるにつれて多くなっている。

家で勉強を「ほとんどしない」と回答した割合に着目すると、小6・中3とも、A群よりD群の方が多く、その格差は有意(**)である。特に中3のD群に着目すると、「ほとんどしない」と回答した生徒の割合は47.0%である。このことから、中3のD群の子どもたちは、ほぼ二人に一人の割合で家庭での学習がほとんど習慣化されていないことが考えられる。

図 3-3-1 小6「学校がある日、どのくらい家で勉強していますか。」 (**)

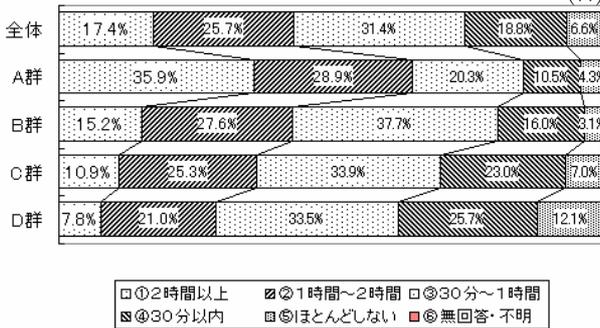


図 3-4-2 中3「家の人に本を読んでもらった経験はありますか。」 (**)

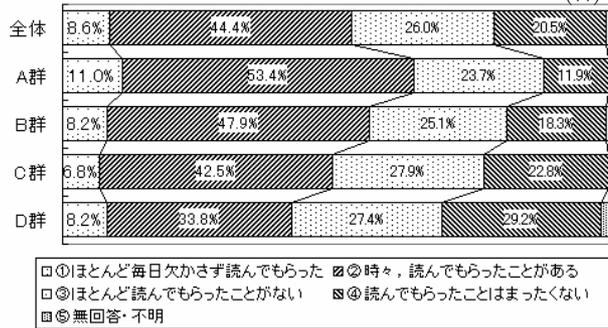
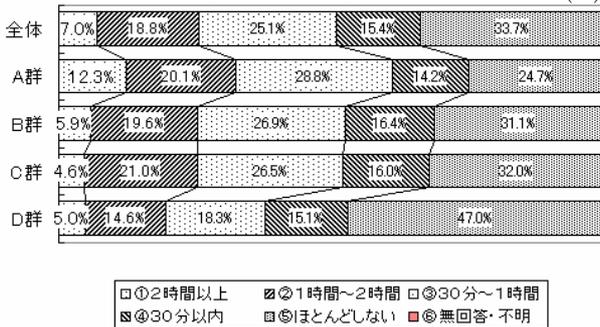


図 3-3-2 中3「学校がある日、どのくらい家で勉強していますか。」 (**)



「ほとんど読んでもらったことがない」「読んでもらったことはまったくない」と回答をしている割合は、小6・中3とも学力階層の下位群ほど多くなる傾向を読み取ることができる。

家で本を「読んでもらったことはまったくない」と回答した割合に注目すると、小6・中3とも、A群よりD群の方が多く、その格差は有意(**)である。

図 3-5-1, 図 3-5-2 は、小6・中3の《「休みの日に家の人に自然の中で遊べるところや、動物園や博物館などに連れて行ってもらった経験はありますか。」の回答結果である。

第1章で述べたように、平成15年度教育課程実施状況調査からも、「学習習慣」に課題があるとの指摘があったとおりであり、京都市の児童生徒についても同様のことがいえる。学校の予習、復習に限らず、家庭での学習時間を確保することは、自らの進路を切り拓くうえで大切にしたい習慣である。今回の分析結果からは、家庭での学習習慣がどのような実態であるのかということをはっきりとするとともに、児童生徒の学力を支えていくために、とりわけD群の児童生徒への家庭学習の定着にむけた具体的な支援が必要であることを示唆する結果となった。

図 3-4-1, 図 3-4-2 は、小6・中3の《「家の人に本を読んでもらった経験はありますか。」の回答結果である。

図 3-5-1 小6「休みの日に家の人に自然の中で遊べるところや、動物園や博物館などに連れて行ってもらった経験はありますか。」 (**)

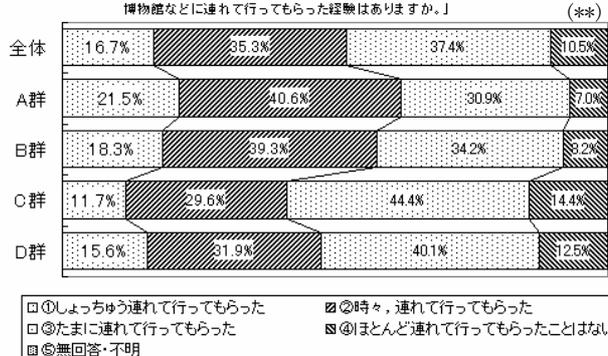


図 3-5-2 中3「休みの日に家の人に自然の中で遊べるところや、動物園や博物館などに連れて行ってもらった経験はありますか。」 (**)

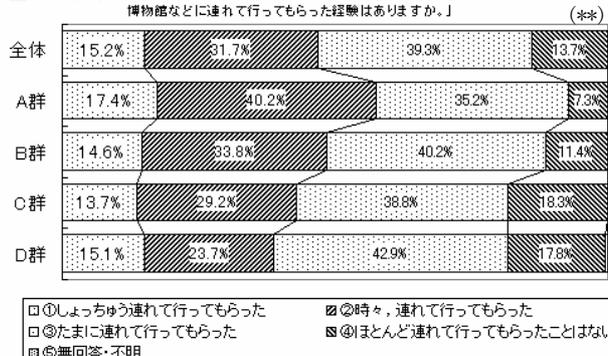
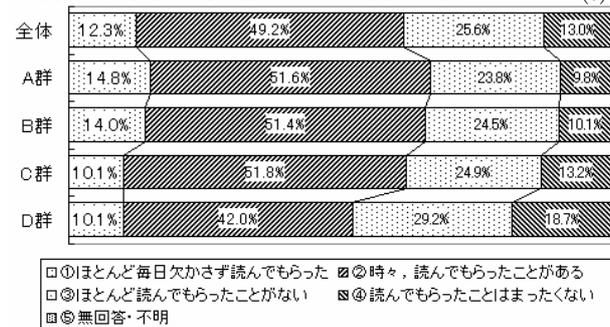


図 3-4-1 小6「家の人に本を読んでもらった経験はありますか。」 (*)



「たまに連れて行ってもらった」「ほとんど連れていってもらったことはない」の回答をしている割合は、学力階層の下位群ほど多くなる傾向を

み取ることができる。「ほとんど連れていってもらったことはない」と回答した割合に注目すると、小6ではA群よりD群の方が多く、その格差は有意(*)である。また、中3においてもその格差は有意(**)である。

家の人に読み聞かせをしてもらった経験や、休日の社会的な経験は、学力階層群別にみたときに、格差となつてみだすことができる。

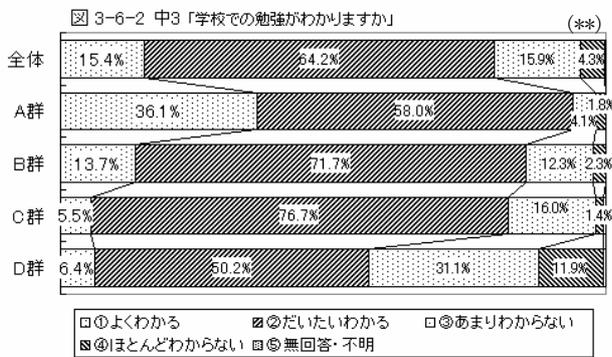
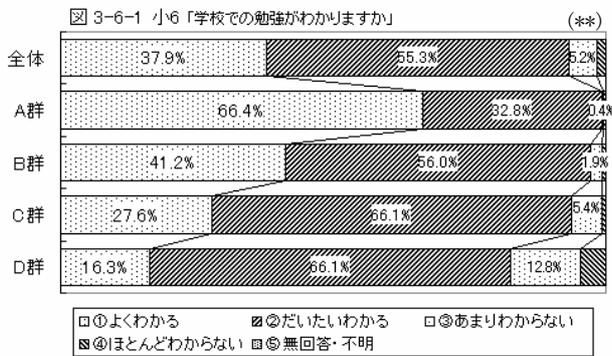
ただ、この格差の背景に潜んでいるものが、「経験」の有無とかかわりがあるのか、「家の人」と過ごす時間についてかわりがあるのか、この結果だけからでは判断することはできない。

しかし、いずれにしても、「家の人と本を通してかわること」「家の人と自然体験をしたり文化的な経験をしたりすること」は、児童生徒の学力を支えるために、家庭に働きかける大切な視点の一つであることを示唆している。

(3) 学校での学習

子どもたちは、どのような意識で学校での学習に取り組んでいるのだろうか。「授業の理解度」や「授業にむかう姿勢」を中心に分析をする。

図3-6-1、図3-6-2は、小6・中3の《「学校での勉強がわかりますか」》の回答結果である。



全体をみると「よくわかる」「だいたいわかる」と肯定的な回答をした割合は、小6で93.2%、中3で79.6%となっている。

「よくわかる」と回答した割合に着目すると、小6・中3とも学力階層の下位群ほど少なくなる。また、「あまりわからない」「ほとんどわからない」と否定的な回答をしている割合は、小6・中3とも学力階層の下位群ほど多くなる傾向を読み取ることができる。

A群とD群とを「(よく・だいたい)わかる」と「(あまり・ほとんど)わからない」という二つの群に分けてA群とD群とを比べると表3-3-1、表3-3-2のようになり、小6・中3とも有意な格差がみられた。

表3-3-1 小6 A群とD群の「授業の理解度」比較 (**)

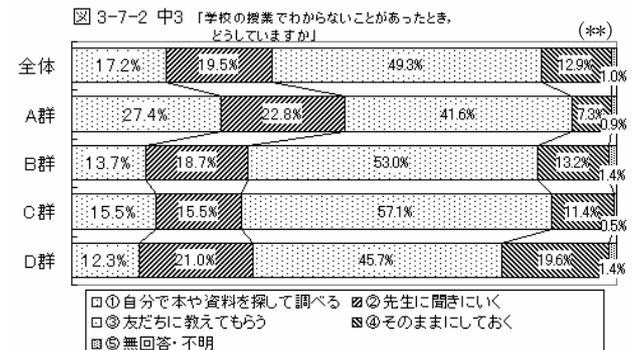
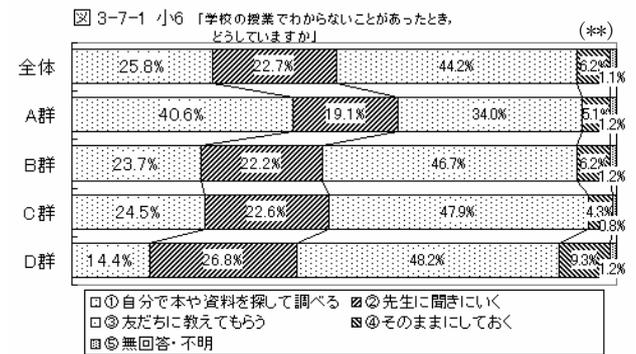
	(よく・だいたい)わかる	(あまり・ほとんど)わからない
A群	99.2%	0.8%
D群	82.4%	17.6%

表3-3-2 中3 A群とD群の「授業の理解度」比較 (**)

	(よく・だいたい)わかる	(あまり・ほとんど)わからない
A群	94.1%	5.9%
D群	56.6%	42.9%

(無回答を省く)

図3-7-1、図3-7-2は、小6・中3の《「学校の授業でわからないことがあったとき、どうしていますか」》の回答結果である。



全体をみると、小6・中3とも、わからないことがあったとき「友だちに教えてもらう」と回答した割合が最も多いことがわかる。

「自分で本や資料をさがして調べる」と回答した割合はA群が最も多いが、小6・中3とも学力階層の下位群になるにつれて、その割合は少なくなる。また「そのままにしておく」と回答した割合について中3のA群とD群とを比較すると格差があり、その差は有意(**)である。

図3-8-1、図3-8-2は、小6・中3の《「授業中、答えがわかったり、自分の考えがまとまったりしたときどうしますか」》の回答結果である。

図3-8-1 小6 「授業中、答えがわかったり、自分の考えがまとまったりしたときどうしますか」 (**)

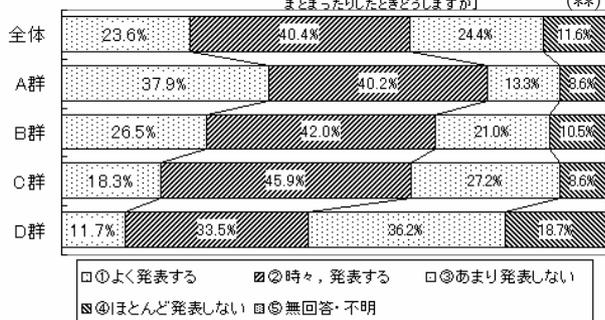
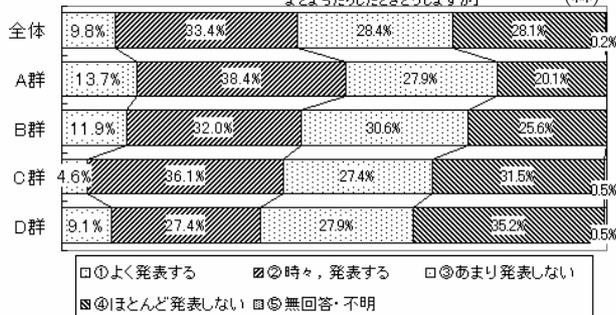


図3-8-2 中3 「授業中、答えがわかったり、自分の考えがまとまったりしたときどうしますか」 (**)



小6の「あまり発表しない」と回答する割合は、学力階層の下位群になるほど多くなっている。また中3の「ほとんど発表しない」と回答する割合は学力階層の下位群になるほど多くなっている。

「ほとんど発表しない」と回答した割合に注目すると、小6・中3とも、A群よりD群の方が多く、その格差は有意(**)である。

以上のように、児童生徒が、どのような思いで日々の授業と向き合っているのかについて、回答結果から、みいだすことができた。

D群の児童生徒の回答からは、「授業がわからない」「わからないことがあってもそのままにしておく」という姿が浮かび上がってくる。また、わかっているにもかかわらず、自分の思いを発表することには消極

的であることがうかがえる回答が多かった。

授業改善を進めるためには、指導した内容がどのくらい児童生徒に届いているのかを分析し、自らの指導の在り方を評価することが大切である。学習指導要領に示される評価の観点で、分析的に評価を進めることはもちろんのことであるが、「わかる授業」という視点から、児童生徒の学習に対する意識や気持ちを把握することも、授業改善を進めるうえで大切にしていきたい視点である。また、わからない問題や自分一人では解決できない問題に直面したときに、どのようにして学習を進めるのか、のように「問題解決の方法を身につける」ことも、授業改善にむけた取組を進めるうえで見直したい視点の一つであると考え

(4) 自己・他者認識

子どもたちは、自分自身をどのようにみつめているのだろうか。自分のもっている可能性を信じているか、また、自分自身を肯定的にとらえているか、という設問の回答結果より分析をする。

図3-9-1、図3-9-2は、小6・中3の《『自分はやればできる力を持っている』と思いますか』》の回答結果である。

図3-9-1 小6 『自分はやればできる力を持っている』と思いますか (*)

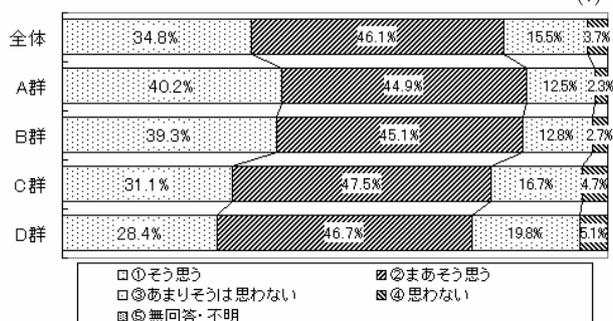
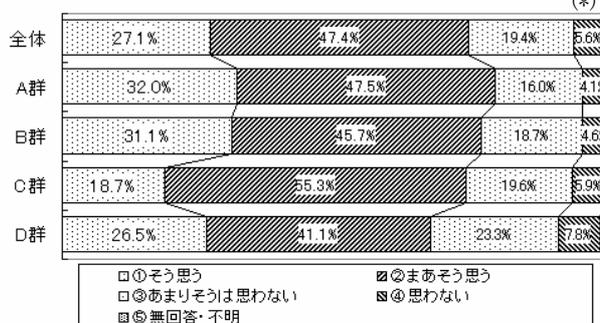


図3-9-2 中3 『自分はやればできる力を持っている』と思いますか (*)



全体をみると、小6よりも中3の方が、「あまり思わない」「思わない」と否定的な回答した割合が

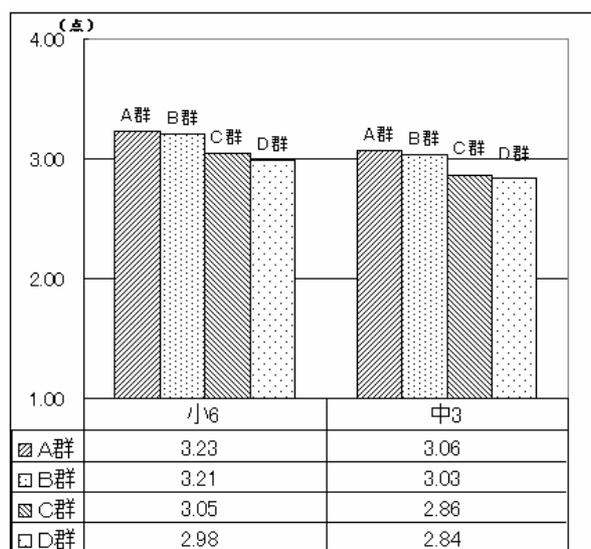
多い。また「あまりそうは思わない」「そう思わない」の回答群をみると、学力階層の下位群ほど、その割合が多くなる。

次に、各群の「得点」を求めて比較する。ここでは、「自分はやればできる力を持っていますか」という設問に対し、肯定的な回答をした場合ほど高い得点を配当し、各群の平均値を求めて簡便に比較できるようにした。各選択肢への配点を表3-4に示す。また、小6・中3各群の得点を算出し、グラフ化した結果を図3-9-3に示す。

表3-4 「自分の可能性を信じる度合い」 選択肢への配点

選択肢	配点
① そう思う	4点
② まあそう思う	3点
③ あまりそう思わない	2点
④ 思わない	1点
⑤ 無回答・不明	0点

図3-9-3 「自分の可能性に対する認識」各群の得点



これをみると、学力階層の上位群ほど、得点が高く、自分の可能性を信じる度合いと、学力との関連がうかがえる結果となった。

図3-10-1、図3-10-2は、小6・中3の《「今の自分のことを好きだと思いますか」》の回答結果である。

全体の「あまりそうは思わない」「思わない」の回答群に着目すると、小6よりも中3の方が、否定的な回答をした割合が多い。

「あまりそうは思わない」「思わない」の回答群に着目すると、小6ではCD群でその回答割合が多

図3-10-1 小6 「今の自分のことを好きだと思いますか」 (**)

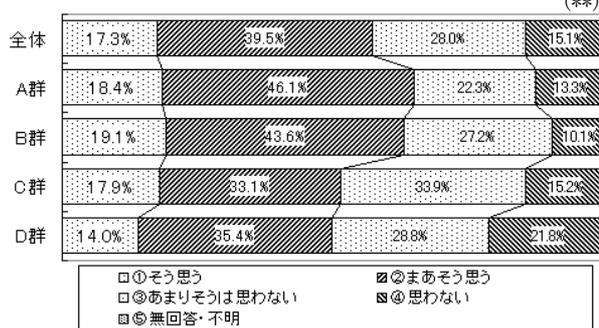
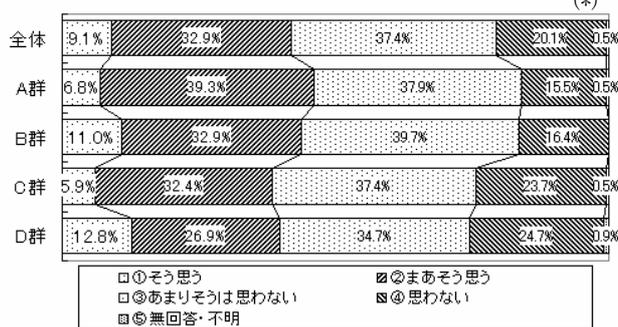


図3-10-2 中3 「今の自分のことを好きだと思いますか」 (*)



くなっている。また、中3では、「思わない」の回答群に着目すると、CD群でその回答割合が多くなっている。

学力階層の下位群の児童生徒が、自身を否定的にとらえてしまう背景には、何があるのだろうか。一方、自身を肯定的にとらえている子どもたちの背景には、どのような「環境」や「経験」があるのだろうか。子どもたちが「自信をもって取り組む」「自分自身を肯定的にとらえる」ことができる学級や学校、家庭や地域社会の在り方について、改めて見直していかなければならない。

そのためには、児童生徒の姿をさらに深く理解することが必要であり、子どもの背景となる家庭生活や生い立ちに目をむけることが大切にされなければならない。家庭との連携や子どもをみつめる視点を示唆する結果であると考えられる。

第2節 保護者の生活意識調査から

本節では、前節で述べたA・B・C・D群の児童生徒の「保護者」の回答結果をグラフ化し、特徴的な結果を示したものを中心に、分析・考察を進める。

(1) 生活

子どもたちの生活習慣を形作るうえで、保護者の生活習慣が関連していることが考えられる。保護者のテレビ視聴の様子や読書の様子は、児童生

徒の学力と関連があるのだろうか。

図3-11-1, 図3-11-2は, 小6・中3の《「お子さんの帰宅後, テレビやビデオをどのように見えていますか」》の回答結果である。

図3-11-1 小6 「お子さんの帰宅後, テレビやビデオをどのように見えていますか」 (**)

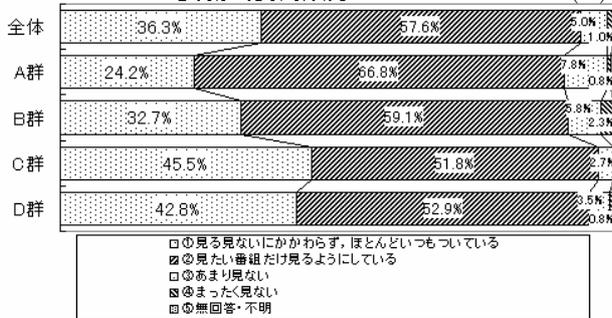
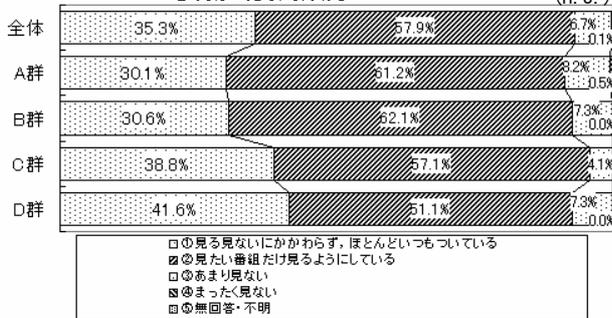


図3-11-2 中3 「お子さんの帰宅後, テレビやビデオをどのように見えていますか」 (n. s.)



「見るみないにかかわらず, ほとんどいつも見ている」の回答群に着目すると, 小6・中3とも学力階層の下位群の保護者ほどその割合が多い。小6・中3ともA群とD群との間には格差があり, その格差は有意(**)である。

図3-12-1, 図3-12-2は, 小6・中3の《「あなた自身は, 家庭で本や新聞・雑誌を読みますか」》の回答結果である。

小6では, 「本もよく読むし, 雑誌や新聞もよく読む」と回答した割合が, 学力階層の下位群の保護者ほど少なくなる。

小6で「ほとんど読まない」の回答群に着目すると, 学力階層の下位群の保護者ほどその割合が多くなる。また, A群とD群との間には格差があり, その格差は有意(**)である。

中3では, 検定の結果, 全体では有意差がないという結果ではあるが, C・D群では, およそ10人に一人が「ほとんど読まない」と回答している結果を読み取ることができる。

児童生徒の生活習慣の形成には, 家庭での保護者のかかわりが大きい役割を担っている。大人の

図3-12-1 小6 「あなた自身は, 家庭で本や新聞・雑誌を読みますか」 (**)

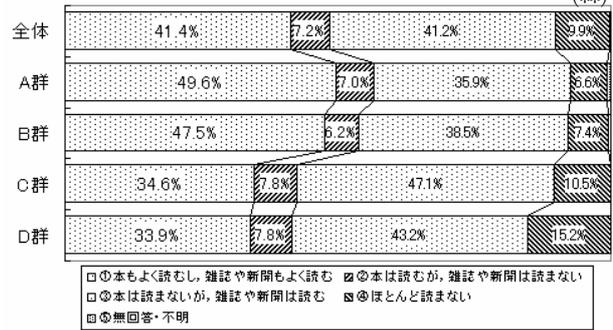
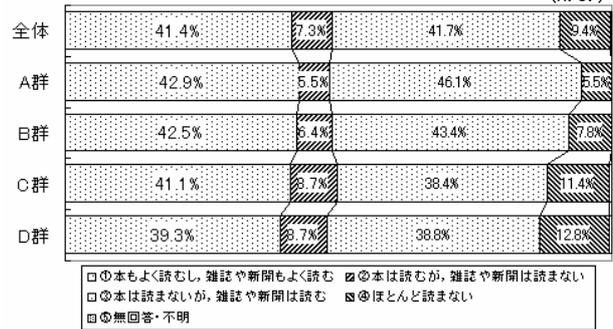


図3-12-2 中3 「あなた自身は, 家庭で本や新聞・雑誌を読みますか」 (n. s.)



意識的または無意識的な行動や習慣は, 児童生徒に「日常的な情報」として伝わり, 習慣や価値観等を形成する上での基礎となる。家庭で本を読む習慣を身につけるためには, 単に「本を読みなさい」というだけではなく, 家庭の中で「本を楽しむ」「本に親しむ」姿があることが大切な条件の一つになると考える。

児童生徒の学力を支えるために, 家庭ではどのような習慣や環境を整えることが必要なのだろうか。児童生徒にとっての「学びの環境」をさらに整えるために, 家庭にむけて情報や話題の提供をすることが必要であろう。

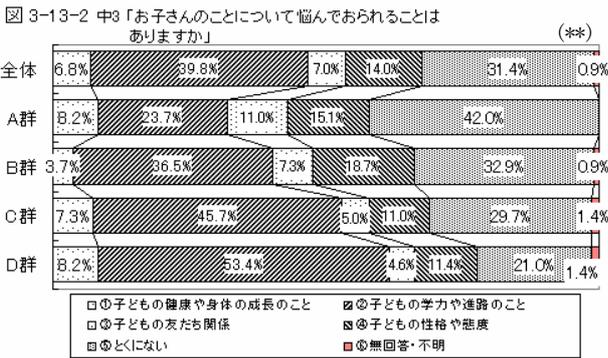
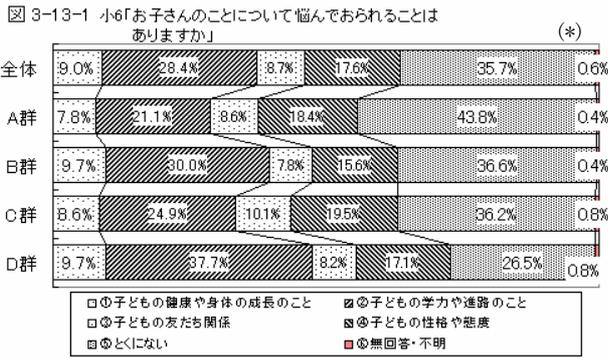
(2) 子どもへのかかわりと学習把握

保護者は子どもに対してどのような不安や悩みをもっているのだろうか。またそれは, 学力階層別にみたときに, 格差があるのだろうか。

次頁図3-13-1, 図3-13-2は, 小6・中3の《「お子さんのことで悩んでおられることはありますか」》の回答結果である。

全体では, 「子どもの学力や進路のこと」についての悩みが多いことが読み取れる。

「子どもの学力や進路のこと」の回答群に着目すると, 小6・中3とも学力階層の下位群の保護者ほどするその割合が多くなる。中3では, A群とD群を比較するとその差は29.7ポイントであり, その格差は有意(**)なものである。この結果か



らは、D 群の保護者が「子どもの学力や進路のこと」に、決して無関心ではなく、むしろ現在の子ども学力状況を的確に把握する中で、進路に不安を抱えていることが考えられる。

(3) 家庭学習

保護者は、自分の子どもの学力について、どのように認識しているのだろうか。

図 3-14-1、図 3-14-2 は、小6・中3の《「お子さんは学校の学習が理解できていると思っておられますか」》の回答結果である。

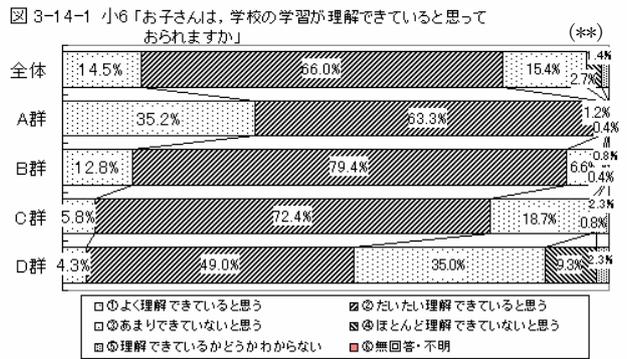
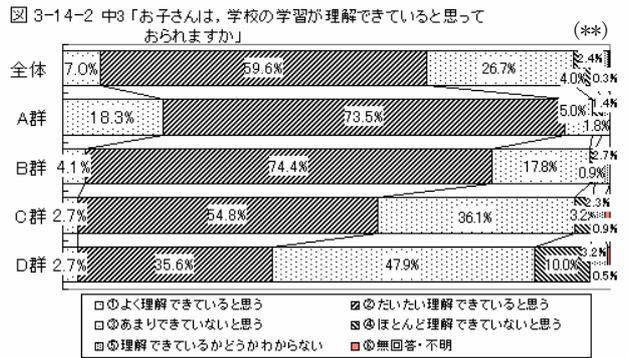
「理解できているかどうか分からない」という回答は、小6・中3の各群とも、非常に少ない割合を示している。「あまりできていないと思う」「ほとんど理解できていないと思う」と回答した群に着目すると、学力階層の下位群の保護者ほどその割合が多くなる。

また、小6・中3の学力と、保護者の「子どもの学習把握」にかかわる回答結果との関連をみるため、相関係数を算出し、表 3-5 に示した。

表 3-5 学力と設問 14「子どもの学習把握」との相関係数
(小6は4教科の通過率合計、中3は5教科の通過率合計)

		設問 14「子どもの学習把握」
小6	4教科合計	0.484
中3	5教科合計	0.410

これをみると学力と保護者の学習把握に関する意識とは、関連があることがわかる。



以上のことから、子どもの学習状況については、それぞれの群の保護者が適切にとらえている姿がうかがえる。

D 群の保護者においては、「子どもが十分に学習内容を理解できていない」ということを把握したうえで、「学力や進路」のことで悩んでいる姿が浮かび上がってきた。これは子どもの進路決定にむけて決して無関心ではなく、むしろ現在の状況を把握したうえで「悩んでいる」姿としてとらえることができるだろう。

保護者がどのような情報を望んでいるのか、そのニーズを探りながら、適切な情報提供を行うなど、学校が家庭に働きかける必要があると考える。

(4) 学校とのかかわり

児童生徒の学力と、保護者の学校とのかかわりには関連があるのだろうか。ここでは、授業参観・懇談会への参加状況の意識や、学校行事・PTA行事等の参加状況の意識について調査結果より分析を進める。

次頁図 3-15-1、次頁図 3-15-2 は、小6・中3の《「学校での教育活動にどのくらい参加されていますか」》の回答結果である。

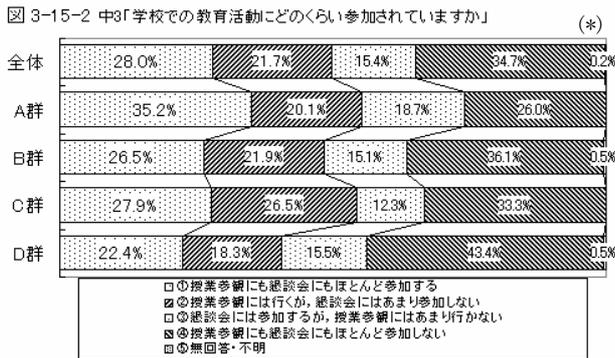
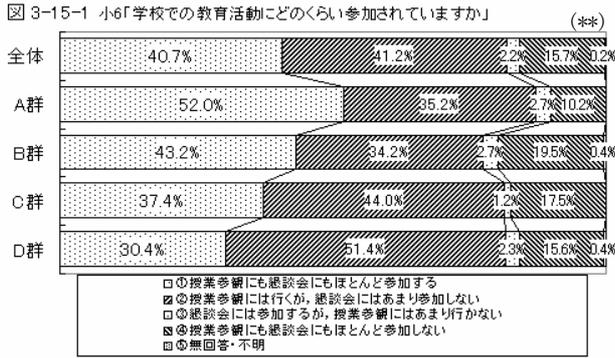
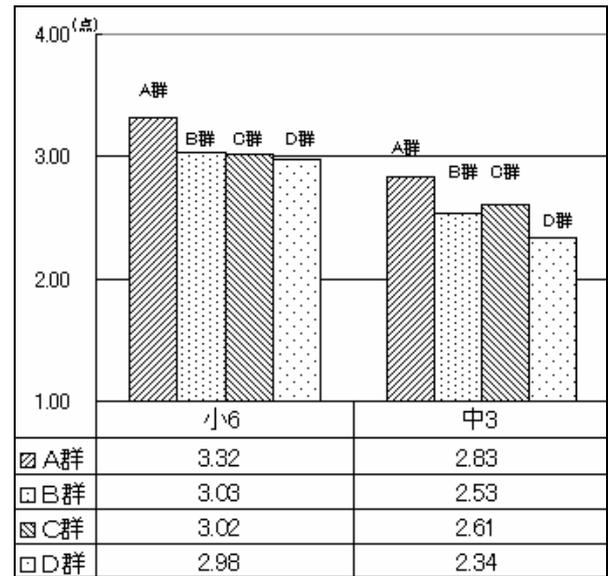


図 3-15-3 「授業参観・懇談会への参加状況」各群の得点



これを見ると、小6・中3ともA群の得点が最も高く、D群の得点が最も低いことがわかる。

全体をみると、「授業参観にも懇談会にも参加する」割合は、小6のほうが多い。逆に中3では、およそ3人に一人が「授業参観にも懇談会にも参加しない」と回答し、その割合が高くなっている。

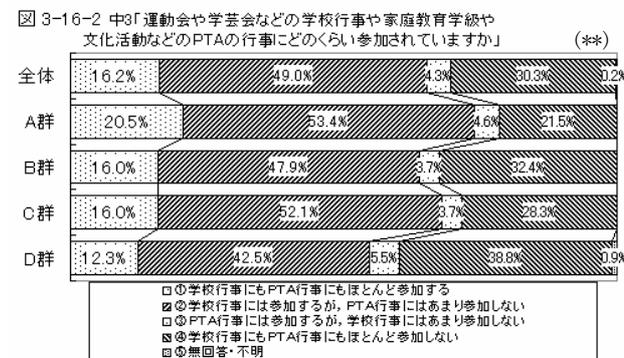
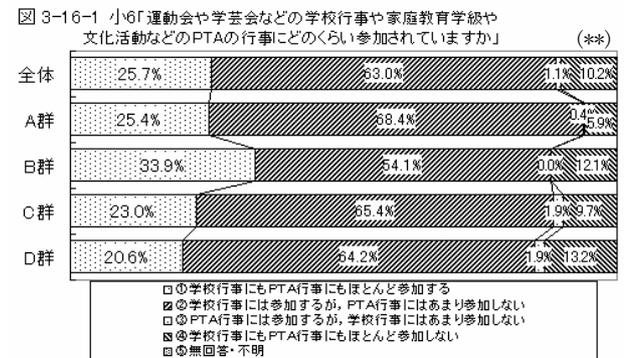
小6では、「授業参観にも懇談会にもほとんど参加する」と回答した群に着目すると、学力階層の下位群の保護者ほどその割合が少なくなり、A群とD群とを比較すると有意(**)な格差がみられた。

次に、各群の「得点」を求めて比較する。ここでは、授業参観や懇談会への参加について、「参加する」という回答をした場合ほど高い得点を配当し、各群の平均値を求めて簡便に比較できるようにした。各選択肢への配点を表3-5に示す。また、小6・中3各群の得点を算出し、グラフ化した結果を図3-15-3に示す。

表 3-6 「授業参観・懇談会の参加状況」選択肢への配点

選択肢	配点
① 授業参観にも懇談会にもほとんど参加する	4点
② 授業参観には行くが、懇談会にはあまり参加しない	3点
③ 懇談会には参加するが、授業参観にはあまり行かない	3点
④ 授業参観にも懇談会にもほとんど参加しない	1点
⑤ 無回答・不明	0点

図 3-16-1, 図 3-16-2 は、小6・中3の《「学校での教育活動にどのくらい参加されていますか」》の回答結果である。

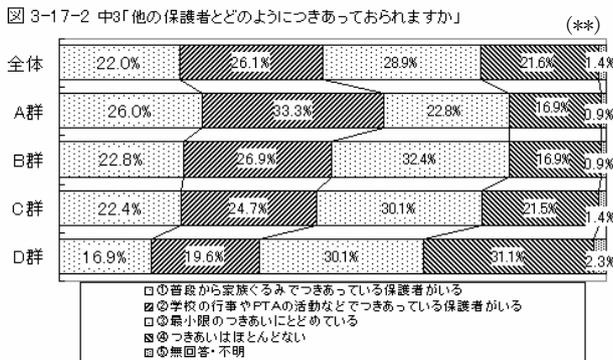
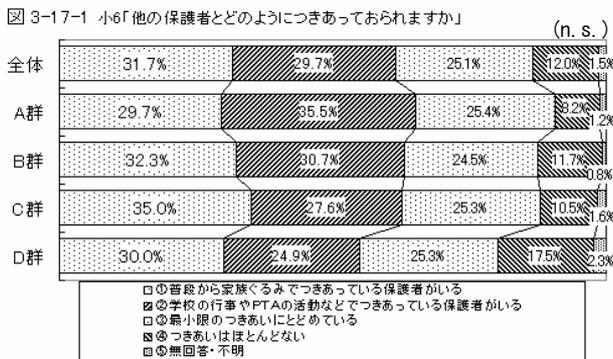


「学校行事にもPTA行事にも参加しない」と回答した群に着目すると、小6・中3とも、学力階層の下位群の保護者ほどその割合が多くなる。A群とD群との間には格差があり、小6・中3とも

その格差は有意(**)である。

授業参観や懇談会、学校行事等に参加することは、子どもの姿を知り、保護者同士のつながりを深めるきっかけとなる。学校とのかかわりに関する意識は、学力階層別にみたときに格差がみられた。家庭により、「参加できない」事情には様々な理由があり、十分考慮しなければならないが、児童生徒の学力との間には何らかの関連があることをふまえた上で、働きかけを行いたい。

図3-17-1、図3-17-2は、小6・中3の《「他の保護者とどのようにつきあっておられますか」》の回答結果である。



中3の「最小限のつきあいにとどめている」「つきあいはほとんどない」と回答した群に着目すると、学力階層の下位群の保護者ほどがその割合が多くなる。D群の保護者では、およそ三人に一人の割合で「つきあいはほとんどない」という回答をしている。A群とD群を比較するとその差は14.2ポイントでありその格差は有意(**)である。

児童生徒の学習にむかう姿を最も効果的に伝えることができる場は授業参観である。また、学校行事やPTA活動は、学校が何を大切にしているのかを直接伝えることができる場でもある。

前項では、学力や進路で悩んでいる保護者の姿が明らかになってきたが、本項では、保護者と学

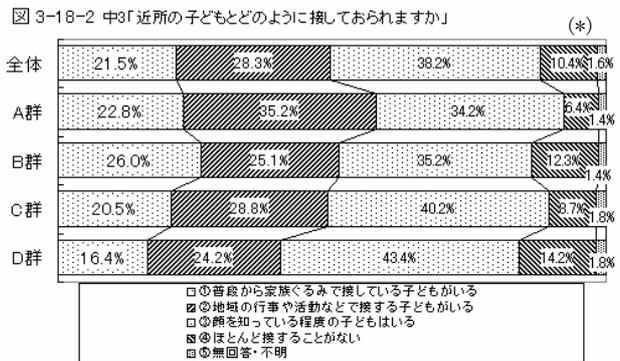
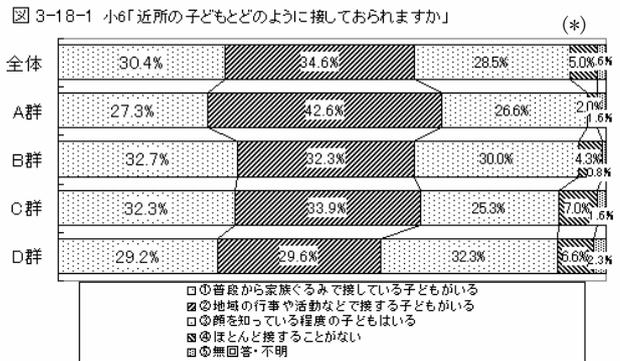
校との接点が薄れている状況も明らかになってきた。また、保護者同士で情報交換をしたり、地域で子どもを見守ったりすることが大切であるといながら、学力階層の下位群の保護者のつながりをはじめ、保護者同士のつながりそのものが希薄になっている傾向がうかがえる。

学校と家庭、家庭と地域社会を結ぶために、学校はどのような働きかけができるのだろうか、課題を提示する結果となった。

(5) 教育や社会に対する考え

保護者は社会に対してどのような考え方をもっているのだろうか。

図3-18-1、図3-18-2は、小6・中3の《「近所の子ともどのように接しておられますか」》の回答結果である。



全体をみると、「家族ぐるみで」「地域の行事や活動などで」接している子どもの割合は、小6の方が多く、中3では、「顔を知っている程度」「ほとんど接することがない」の割合が多くなっている。中3では、「顔を知っている程度の子どもはいる」「ほとんど接することはない」と回答した群に着目すると、学力階層の下位群ほど、その割合が多くなる。

子どもをできるだけ多くの大人で見守ることは、子どもの健全な発達を促すうえで大切なことである。本結果は、保護者の地域社会に対

する見方を示すとともに、地域社会における「大人と子どもとの人間関係」の希薄さについても示唆しているのではないかと考える。

(21) 第3章に掲載する図「各設問の回答結果と学力階層群とのクロス集計した結果」については、「 χ^2 検定」によって有意水準を求め、有意差の判定を行った。また、同じ設問でA群とD群の割合の比較を行った際は、すべてA群とD群との「比率の差の検定」によって有意水準を求め、有意差の判定を行った。

第4章 確かな学力の定着を願って

本章では、「学力定着調査」「意識調査」分析結果と、筆者がこれまでの学校現場で学んだ経験とをふまえ、今後の取組について若干の提言を行う。

第1節 授業改善にむけて

(1) 「学習意欲」を高めること

「学習意欲」を高めるためには、子どもたちが「わかる喜び」を多く体験することが、大きな支えになると考える。

表4-1では、学力定着調査結果と設問21「授業の理解度」との相関について示した。

表4-1 学力と設問21「授業の理解度」との相関係数
(小6は4教科の通過率合計、中3は5教科の通過率合計)

	設問21「授業の理解度」
小6 4教科合計	0.445
中3 5教科合計	0.440

これをみると、学力定着調査結果と「授業の理解度」には、ある程度の相関関係があると考えられることができる。

また、第3章で述べたように、「学校での勉強がわかりますか」で「よくわかる」と回答した子どもは、学力階層の上位群ほど多かった。

以上のことから、授業改善にむけた取組の視点として次の点に留意したい。

毎時間の学習を終えたときに、子どもたちが「わかった」「できた」という達成経験や満足感を味わうことができる授業展開を工夫する。特にD群の子ども達に焦点をあてた評価を、指導者自らの「指導の評価」として受け止め、授業改善に生かす。

一方、学力定着調査の分析から、「関心・意欲・態度」にかかわる観点で、学力階層で格差のみられた教科・領域が明らかになった。また「授業中、

答えがわかったり、自分の考えがまとまったりしたとき、どうしますか」の回答結果についても、「発表する」と積極的な姿勢を回答した子どもは、学力階層の上位群ほど多く、下位層群ほど「発表しない」のように消極的な姿勢を示す回答がおおかた。学力階層の下位群の子どもたちは、自分の思いを表現することなく、受け身の学習姿勢でいることがうかがえる。

以上のことから、授業改善にむけた取組の視点として次の点に留意したい。

2章概括 1・2 に示した学力階層別にみたときに格差のみられた教科・領域に特に焦点をあて、学習に対する関心や意欲を高める工夫を授業のなかで具体的に位置づける。また、自分の思いを安心して表現できる場の設定や、学級集団作りにむけて、さらに取組を進める。

(2) 学び進める力を身につけること

子どもたちが自ら考え、主体的に判断して学習を進めるためには、自力で学び進める力を身につけることが大切である。そのためには、「学習方法」を身につけることを意識した学習展開が必要である。

《「学校の授業でわからないことがあったとき、どうしていますか」》という問いに対し、学力階層の上位群ほど自力解決の姿勢を示し、学力階層の下位群になるにつれて「そのままにしておく」と回答した割合が多くなった。また、学力階層の上位群は、自分の可能性を信じる度合いが高い傾向がみられた。課題を自らの力で解決する経験は自信となり、次の活動意欲に結びつく。逆に、解決の方法や道筋がみいだせないことや、自力解決の経験が少ないことは、積極的な学びの姿を後押しすることにはつながらない。

そこで、授業改善にむけた取組の視点として次の点に留意したい。

学習課題を解決するための確かな方法を身につけることを意識した学習活動を大切にする。
たとえば「自分で本や資料を探して選び、調べる」「自分で図や表にまとめて考え、表現する」といった学習過程・経験を大切にするとともに、その方法を身につける活動を重視する。

学力定着調査の分析からは、「思考・判断」「表現」「処理」にかかわる観点で、学力階層間の格差がある教科・領域が明らかになった。特に、「表現」にかかわる観点については、D群だけ低いポイントを示し、ABC群との格差を示した教科・領域が

多かった。

児童生徒が主体的に判断し、筋道立てて考えたり表現したりできる力を培う基礎を培うため、授業改善にむけた取組の視点として以下の点に留意したい。

第2章概括 1・2 に示した「格差のみられた教科領域および観点」に焦点をあて、「思考・判断」「表現」「処理」にかかわる学習活動の在り方を工夫する。特に「表現」にかかわる観点について支援を必要としているD群の児童生徒に焦点をあて、自分の考えを筋道立てて表現する等の学習の過程や場を、授業のなかで具体的に位置づける。

第2節 家庭への働きかけにむけて

都市化や少子化、核家族化のなかで、家族間の結びつきや交流に変化が生じてきている。その結果、教育に関する情報が少ないために「子育ての社会的孤立」や「育児不安」を体験しやすい環境にあり、さらには、「子どもとの接し方」や「教育の仕方」がわからない、自信がもてない親が増加していることは第1章で述べたとおりである。

「保護者同士のつながり」「近所の子どもとの接し方」に関する意識調査結果からは、大人同士や、大人と子どもとの人間関係の希薄さを示す一面がみられた。

家庭教育は、すべての教育の出発点であり、家庭は「子どもの心のより所」となるものであろう。保護者が安心して子育てができる環境を整えるために、目の前の子どもの実態をみすえ、学校と家庭がさらに連携を進めることが必要である。そのことは結果として家庭の教育力を高めることにつながり、子どもたちの確かな学力をはぐくむ基盤となると考える。

(1) 学びの「環境作り」を進めること

「朝食の摂取状況」「テレビ等の視聴時間」は、学力階層群ごとにみたときに格差がみられた。一般的に、朝食をきちんと食べることは体調を整える上でも大切な習慣である。またテレビの視聴時間についても、「ほどよい視聴時間」があるはずである。価値観が多様化しているとはいえ、やはり子どもにとって最もよい「習慣」や「環境」とは何かということ、学校と家庭が連携をし、子どもの情報を共有しながら話し合う必要がある。特に、情報量が不足していると思われる家庭には、子どもの健やかな成長を願い、家庭への働きかけをさ

らに進めることが必要である。そのためにも、家庭訪問を通して子どもの生活を肌で感じる事ができる話し合いも大切にしたい。

そこで家庭への働きかけの視点として以下の点に留意したい。

睡眠や食事、排便などの「基本的な生活習慣」や「時間の使い方」について、子どもが最も力が発揮できる「習慣」「環境」とは何かについて学校と家庭が子どもの情報を共有しながら話し合う。そして、学校は何かができるのか、家庭では何かができるのかを明らかにし、よりよい生活習慣の確立にむけた「方針」について、家庭と学校が共通理解する。

家の人に読み聞かせをしてもらった経験の有無や、家の人との自然体験についても、学力階層群ごとにみたときに格差がみられた。また、保護者自身のテレビや本・新聞・雑誌等のかかわりや学校・地域社会へのかかわりについても学力階層群ごとにみたときに格差がみられた。

このことから、子どもを取り巻く「環境」と学力とは、関連があると考えられることができる。

ここでいう「環境」とは、物的な内容に限らず、大人の基本的な生活習慣や考え、価値観など、子どもを取り巻くすべての要素を「環境」としてとらえたい。目の前にいる子どもにとって、最も力が発揮できる「環境」とは何か、学校と家庭がこれからの子どもの姿をみすえて「環境」を整える努力を進めていくことが大切である。そのために、大人は子どもにとっての「よきモデル」であることを意識したい。

学びの「環境作り」を進めるために、学校から家庭への働きかけを進める視点について以下の点に留意したい。

物的な面だけでなく、大人自身の習慣・行動・価値観なども、子ども育てる「環境」を支えるものであるという視点にたち、しっかりした子育ての「方針」のもと、大人自らが見本をみせたり、行動を共にしたりする姿勢を心がける。

習慣や環境を変えることは、簡単にできるものではない。日々の小さな努力や積み重ねが、結果として、習慣や環境を変えていく大きな力となる。

学校は、保護者の意見や考えを共感的に理解する姿勢を大切に、常に子どもを中心にすえて話し合いたい。また、学びの環境を整えることは、目の前の子どもたちが親になったときに、世代をこえて引き継がれていくものになるであろう。学びの環境作りは「次の世代の環境作り」にかかわるということを互いに意識したい。

(2) 家庭での学習を習慣化すること

家庭での学習時間を確保し、毎日継続した学習を積み上げることは、生涯にわたって学び続ける基礎をつくるものであり、自らの進路を切り拓く上で大切にしたい習慣である。

表 4-2 は、「家庭学習の必要性」と、「学習にむかう姿勢」「学習の意義」との相関係数を示したものである。

表 4-2 設問 13「家庭学習の必要性」との相関係数

	設問 29 「学習にむかう姿勢」	設問 30 「学習の意義」
小 6	0.379	0.320
中 3	0.315	0.302

これをみると、それぞれの関係は 0.3 以上の数値を示し、弱い相関があることがわかる。つまり、家庭学習を必要だと感じている児童生徒は、「苦手なものでも努力すればできる」「学習していることは社会で役にたつ」のように、学習に対して肯定的な気持ちをもっていると考えることができる。

以上のことから、児童生徒への働きかけとして次の点に留意したい。

家庭学習のもつ意味や必要性について、子どもたちが自覚できるように働きかける。

また、学校と家庭は、家庭学習を習慣化することの意義や必要性について共通理解し、同じ思いをもって子どもたちに働きかける。

小 6、中 3 の学力定着調査の分析結果を、小 6 から中 3 への経年変化としてとらえるならば、全体のばらつきは広がる傾向にある。また、D 群の得点率が他の群に比べて極端に低い教科領域・観点があった。

一方、意識調査の結果からは、学力階層の下位群の子どもほど、家庭での学習時間は少なくなる傾向が明らかになった。中 3 の D 群では、半数近くが「ほとんど学習しない」と回答している。

以上のことから、家庭学習の定着にむけた取組、特に D 群の児童生徒への家庭学習の定着にむけた支援が、喫緊の課題であることを示している。

子どもたちの確かな学力の定着を願い、家庭学習の習慣を身につけるために、以下の点に留意したい。

学校は、家庭学習の進め方についてより具体的な方針を示す。特に、学力階層の下位群の子どもたちに焦点をあてて、具体的な内容・時間・計画等について提示し、適切な評価を行うことを通して、家庭学習が習慣化できるように支援をする。

また、その内容については、家庭との連絡を密にし、常に共通理解のもと、取組が進められるようにする。

おわりに

ある小学校の国語の授業で、素晴らしい授業を参観する機会に恵まれたことがある。学級のほぼ全員の子どもたちが一生懸命に挙手をして自分の意見を述べようとする姿や、それを聞いてまた自分の意見を交流していく姿に、胸が熱くなる思いがした。そのあと、指導者の先生に「いい授業でしたね。」と思いを伝えたとこ、その先生は次のように述べられた。「ありがとうございます。でも、最後のあの発問をしたときに A 君に手をあげて発表してもらいたかったんですが、手が挙がらなくて…それが残念です。」

この指導者の先生は、全体の活発な話し合いをプラスの評価としてとらえながらも、焦点化した A 君の授業への参加の様子を、「自分自身への授業の評価」として常にとらえながら授業を展開されていたのである。その先生の誠実な取組と、すべての子どもに対する温かいまなざしに、「教師」としての姿勢を学ばせていただいたと感じている。

一人一人の子どもたちの姿をみれば、自分の指導の在り方がはたして本当に子どもに届くものであったのかがすぐにわかる。子どもは指導の在り方を映し出す「鏡」であり、子どもの姿に学ぶことが自らの授業力向上にむけた姿勢として必要なことであろう。そこで大切なことは、一人一人の子どもとしっかりと向き合うことである。信頼関係を結びながら、どれだけ「子どもを豊かに理解すること」ができるのかが、「授業改善」や「授業力向上」にむけた大きなポイントであるといえる。

今回、実態調査分析を進め、拙稿を執筆しながら、様々な子ども姿や保護者の姿と出会うことができた。そのなかで、子どもの姿をさらに明らかにするために、分析の方法については工夫を加える必要性を感じている。また、子ども理解を進めるために、児童生徒の発達面や心理面にせまるための文献にさらにあたる必要があるとも感じた。いずれにしても、「子どもの姿に学ぶこと」「子どもを豊かに理解すること」がいかに大切なことであるのか、改めて感じた次第である。

最後に、子どもたちの豊かな成長と、一人一人がさらに大切にされる社会の発展を願うとともに、本研究のために様々な視点でご支援、ご指導いただいた関係者の皆様に感謝の意を表したい。

付表【基礎表1 児童生徒対象 意識調査結果】

質問項目	選択肢	小学校6年生 児童 1027人										中学校3年生 生徒 876人									
		全員 (100%)		A群 (25%)		B群 (25%)		C群 (25%)		D群 (25%)		全員 (100%)		A群 (25%)		B群 (25%)		C群 (25%)		D群 (25%)	
		度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)	度数 (人)	相対度数 (%)
【1】生活…体調 ふだんの体の調子はどうか。	よい	563	54.8%	128	50.0%	145	56.4%	146	56.8%	144	56.0%	324	37.0%	84	34.4%	76	34.7%	74	33.8%	90	41.1%
	まあよい	415	40.4%	107	41.8%	103	40.1%	100	38.9%	105	40.9%	435	49.7%	108	43.3%	119	54.3%	109	49.8%	99	45.2%
	あまりよくない	44	4.3%	18	7.0%	9	3.5%	11	4.3%	6	2.3%	101	11.5%	27	12.3%	22	10.0%	32	14.6%	20	9.1%
	よくない	5	0.5%	3	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.8%	16	1.8%	0	0.0%	2	0.9%	4	1.8%	10	4.6%
	無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
【2】生活…充実感 全般的に今の生活をどう思いますか。	充実している	365	35.5%	108	42.2%	88	34.2%	84	32.7%	85	33.1%	232	26.5%	61	27.9%	58	26.5%	52	23.7%	61	27.9%
	まあ充実している	567	55.2%	121	47.3%	145	56.4%	154	59.9%	147	57.2%	497	56.7%	120	54.8%	128	58.4%	131	59.8%	118	53.9%
	あまり充実していない	80	7.8%	25	9.8%	20	7.8%	17	6.6%	18	7.0%	112	12.8%	30	13.7%	29	13.2%	25	11.4%	28	12.8%
	充実していない	14	1.4%	2	0.8%	4	1.6%	2	0.8%	6	2.3%	35	4.0%	8	3.7%	4	1.8%	11	5.0%	12	5.5%
	無回答・不明	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
【3】生活リズム…就寝 次の日に学校があるとき、たいたい何時頃までに寝ますか。	午後10時まで	362	35.2%	77	30.1%	86	33.5%	100	38.9%	99	38.5%	38	4.3%	5	2.3%	10	4.6%	6	2.7%	17	7.8%
	午後11時まで	428	41.7%	104	40.6%	111	43.2%	112	43.6%	101	39.3%	190	21.7%	43	19.6%	40	18.3%	54	24.7%	53	24.2%
	午前0時まで	162	15.8%	48	18.8%	44	17.1%	32	12.5%	38	14.8%	339	38.7%	92	42.0%	91	41.6%	76	34.7%	80	36.5%
	午前1時まで	48	4.7%	20	7.8%	10	3.9%	7	2.7%	11	4.3%	195	22.3%	55	25.1%	52	23.7%	48	21.9%	40	18.3%
	午前1時すぎ	26	2.5%	6	2.3%	6	2.3%	6	2.3%	8	3.1%	114	13.0%	24	11.0%	26	11.9%	35	16.0%	29	13.2%
無回答・不明	1	0.1%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
【4】生活リズム…朝食 学校のある日、朝食を食べますか。	いつも食べる	827	80.5%	221	86.3%	216	84.0%	210	81.7%	180	70.0%	629	71.8%	190	86.8%	158	72.1%	153	69.9%	128	58.4%
	食べる日のほうが多い	102	9.9%	23	9.0%	22	8.6%	23	8.9%	34	13.2%	103	11.8%	13	5.9%	29	13.2%	22	10.0%	39	17.8%
	食べる日と食べない日が半々	48	4.7%	6	2.3%	8	3.1%	10	3.9%	24	9.3%	43	4.9%	7	3.2%	13	5.9%	11	5.0%	12	5.5%
	食べない日のほうが多い	26	2.5%	5	2.0%	8	3.1%	6	2.3%	7	2.7%	49	5.6%	3	1.4%	10	4.6%	14	6.4%	22	10.0%
	ほとんど食べない	24	2.3%	1	0.4%	3	1.2%	8	3.1%	12	4.7%	52	5.9%	6	2.7%	9	4.1%	19	8.7%	18	8.2%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
【5】生活環境…朝食時の状況 ふだん、朝食を誰と食べることが多いですか。	家の人全員	232	22.6%	59	23.0%	49	19.1%	52	20.2%	72	28.0%	139	15.9%	42	19.2%	30	13.7%	35	16.0%	32	14.6%
	全員ではないが大人の人と	348	33.9%	92	35.9%	97	37.7%	97	37.7%	62	24.1%	236	26.9%	59	26.9%	67	30.6%	55	25.1%	55	25.1%
	きょうだいなど、子どもだけで	245	23.9%	92	35.7%	57	22.2%	63	24.9%	73	28.4%	187	21.3%	52	23.7%	46	21.0%	52	23.7%	37	16.9%
	ひとりで	201	19.6%	53	20.7%	54	21.0%	45	17.5%	49	19.1%	310	35.4%	66	30.1%	76	34.7%	76	34.7%	92	42.0%
	無回答・不明	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	4	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	3	1.4%
【6】生活環境…夕食時の状況 ふだん、夕食を誰と食べることが多いですか。	家の人全員	476	46.3%	106	41.4%	104	40.5%	132	51.4%	134	52.1%	375	42.8%	95	43.4%	88	40.2%	96	43.8%	96	43.8%
	全員ではないが大人の人と	452	44.0%	123	48.0%	128	49.8%	106	41.2%	95	37.0%	351	40.1%	90	41.1%	93	42.5%	87	39.7%	81	37.0%
	きょうだいなど、子どもだけで	49	4.8%	12	4.7%	11	4.3%	9	3.5%	17	6.6%	53	6.1%	12	5.5%	10	4.6%	14	6.4%	17	7.8%
	ひとりで	49	4.8%	15	5.9%	14	5.4%	9	3.5%	11	4.3%	96	11.0%	22	10.0%	28	12.8%	22	10.0%	24	11.0%
	無回答・不明	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
【7】家庭環境…家族団らん 一週間のうちで、一緒に住んでいる家の全員がそろって夕食を食べる日はどれくらいありますか。	ほぼ毎日	390	38.0%	76	29.7%	93	36.2%	110	42.8%	111	43.2%	272	31.1%	58	26.5%	57	26.0%	73	33.3%	84	38.4%
	週に3~4日くらい	228	22.2%	67	26.2%	48	18.7%	52	20.2%	61	23.7%	161	18.4%	43	19.6%	46	21.0%	46	21.0%	26	11.9%
	週に1~2日くらい	265	25.8%	84	32.8%	80	31.1%	63	24.5%	38	14.8%	301	34.4%	93	42.5%	83	37.9%	62	28.3%	63	28.8%
	ほとんどない	144	14.0%	29	11.3%	36	14.0%	32	12.5%	47	18.3%	141	16.1%	25	11.4%	33	15.1%	38	17.4%	45	20.5%
	無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
【8】学校の昼食(中学生のみ) 主に、学校での昼食は何を食べていますか。	家からの弁当	590	67.4%	164	74.9%	148	67.6%	145	66.2%	133	60.7%	189	21.6%	42	19.2%	40	18.3%	50	22.8%	57	26.0%
	給食	12	1.4%	1	0.5%	3	1.4%	3	1.4%	5	2.3%	4	0.5%	1	0.5%	2	0.9%	0	0.0%	1	0.5%
	パンと飲み物	4	0.5%	1	0.5%	2	0.9%	0	0.0%	1	0.5%	77	8.8%	11	5.0%	26	11.9%	19	8.7%	21	9.6%
	パンだけ	3	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	1.2%	3	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	2	0.9%
	家からの弁当とパンが半々	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
【9】生活実態…テレビ視聴時間 学校のある日、1日合計何時間くらい、テレビを見たり、テレビゲームをしたりしますか。	ほとんど見ない、しない	75	7.3%	27	10.5%	23	8.9%	10	3.9%	15	5.8%	47	5.4%	12	5.5%	7	3.2%	13	5.9%	15	6.8%
	1時間まで	119	11.6%	34	13.3%	23	8.9%	30	11.7%	32	12.5%	72	8.2%	25	11.4%	15	6.8%	14	6.4%	18	8.2%
	1~2時間	218	21.2%	66	25.8%	51	19.8%	54	21.0%	47	18.3%	210	24.0%	69	31.5%	58	26.5%	52	23.7%	31	14.2%
	2~3時間	246	24.0%	60	23.4%	67	26.1%	67	26.1%	52	20.2%	217	24.8%	56	25.6%	63	28.8%	46	21.0%	46	21.0%
	3~4時間	167	16.3%	39	15.2%	49	19.1%	40	15.6%	39	15.2%	164	18.7%	36	16.4%	51	23.3%	33	15.1%	44	20.1%
4時間以上	200	19.5%	30	11.7%	43	16.7%	56	21.8%	71	27.6%	165	18.8%	25	11.4%	32	14.6%	43	19.6%	65	29.7%	
無回答・不明	2	0.2%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	1	0.4%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	0	0.0%	
【10】生活実態…コンピュータ利用 家で、コンピュータを主にどのようなことに使っていますか。	文章や絵をかき、写真を加工する、音楽をきくなど、趣味に使っている	129	12.6%	33	12.9%	39	15.2%	28	10.9%	29	11.3%	136	15.5%	40	18.3%	40	18.3%	32	14.6%	24	11.0%
	ゲームをしている	225	21.9%	53	20.7%	49	19.1%	69	26.8%	54	21.0%	120	13.7%	32	14.6%	30	13.7%	32	14.6%	26	11.9%
	わからないことなどをインターネットで調べている	260	25.3%	83	32.4%	73	28.4%	59	23.0%	45	17.5%	251	28.7%	84	38.4%	63	28.8%	62	28.3%	42	19.2%
	メールをしている	41	4.0%	11	4.3%	13	5.1%	8	3.1%	9	3.5%	60	6.8%	17	7.8%	15	6.8%	10	4.6%	18	8.2%
	チャットや掲示板への書きこみをしている	11	1.1%	1	0.4%	3	1.2%	2	0.8%	5	1.9%	34	3.9%	5	2.3%	9	4.1%	11	5.0%	9	4.1%
使っていない(家にコンピュータがない場合も含む)	352	34.3%	75	29.3%	79	30.7%	86	33.5%	112	43.6%	264	30.1%	41	18.7%	57	26.0%	68	31.1%	98	44.7%	
無回答・不明	9	0.9%	0	0.0%	1	0.4%	5	1.9%	3	1.2%	11	1.3%	0	0.0%	5	2.3%	4	1.8%	2	0.9%	
【11】生活実態…テレビ視聴内容 テレビや新聞などで、ニュースや報道番組を見ていますか。	できるだけ、自分から見たり読んだりしている	263	25.6%	79	30.3%	62	24.1%	60	23.3%	62	24.1%	168	19.2%	42	19.2%	37	16.9%	46	21.0%	43	19.6%
	家の人が見たり読んだりしているので、いつしよに見たり読んだりしている	381	37.1%	99	38.7%	97	37.7%	97	37.7%	88	34.2%	211	24.1%	59	26.9%	58	26.5%	47	21.5%	47	21.5%
	時々、何げなく見たり読んだりすることがある	314	30.6%	74	28.9%	83	32.3%	80	31.1%	77	30.0%	423	48.3%	110	50.2%	103	47.0%	109	49.8%	101	46.1%

[18]生活経験…自然体験、社会経験 休みの日に家の人に自然の中で遊べるところや、動物園や博物館などに連れて行ってもらった経験はありますか。	172	16.7%	55	21.5%	47	18.3%	30	11.7%	40	15.6%	133	15.2%	38	17.4%	32	14.6%	30	13.7%	33	15.1%
しよっゆう連れて行ってもらった																				
時々、連れて行ってもらった	363	35.3%	104	40.6%	101	39.3%	76	29.6%	82	31.9%	278	31.7%	88	40.2%	74	33.8%	64	29.2%	52	23.7%
たまに連れて行ってもらった	384	37.4%	79	30.9%	88	34.2%	114	44.4%	103	40.1%	344	39.3%	77	35.2%	88	40.2%	85	38.8%	94	42.9%
ほとんど連れて行ってもらったことはない	108	10.5%	18	7.0%	21	8.2%	37	14.4%	32	12.5%	120	13.7%	16	7.3%	25	11.4%	40	18.3%	39	17.8%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
[19]学習塾の頻度 1週間は何日くらい、学習塾に通っていますか。	67	6.5%	32	12.6%	18	7.0%	10	3.9%	7	2.7%	40	4.6%	13	5.9%	5	2.3%	13	5.9%	9	4.1%
週に5日以上																				
週に3日～4日	160	15.6%	69	27.0%	36	14.0%	36	14.0%	19	7.4%	309	35.3%	111	50.7%	88	40.2%	63	28.8%	47	21.5%
週に1日～2日	251	24.4%	46	18.0%	67	26.1%	66	25.7%	72	28.0%	208	23.7%	36	16.4%	55	25.1%	57	26.0%	60	27.4%
通っていない	548	53.4%	109	42.6%	136	52.9%	144	56.0%	159	61.9%	317	36.2%	59	26.9%	70	32.0%	86	39.3%	102	46.6%
無回答・不明	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.5%
[20]習い事の頻度 一週間に何日くらい、学習塾以外の習いごと(スポーツや音楽、習字、英会話など)をしていますか。	103	10.0%	24	9.4%	24	9.3%	28	10.9%	27	10.5%	83	9.5%	13	5.9%	15	6.8%	28	12.8%	27	12.3%
週に5日以上																				
週に3日～4日	189	18.4%	55	21.5%	52	20.2%	39	15.2%	43	16.7%	59	6.7%	19	8.7%	18	8.2%	10	4.6%	12	5.5%
週に1日～2日	452	44.0%	112	43.8%	118	45.9%	125	48.6%	97	37.7%	223	25.5%	76	34.7%	59	26.9%	53	24.2%	35	16.0%
していない	279	27.2%	65	25.4%	59	23.0%	65	25.3%	90	35.0%	510	58.2%	111	50.7%	127	58.0%	128	58.4%	144	65.8%
無回答・不明	4	0.4%	0	0.0%	4	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
[21]授業の理解度 学校での勉強がわかりますか。	389	37.9%	170	66.4%	106	41.2%	71	27.6%	42	16.3%	135	15.4%	79	36.1%	30	13.7%	12	5.5%	14	6.4%
よくわかる																				
だいたいわかる	568	55.3%	84	32.8%	144	56.0%	170	66.1%	170	66.1%	562	64.2%	127	58.0%	157	71.7%	168	76.7%	110	50.2%
あまりわからない	53	5.2%	1	0.4%	5	1.9%	14	5.4%	33	12.8%	139	15.9%	9	4.1%	27	12.3%	35	16.0%	68	31.1%
ほとんどわからない	17	1.7%	1	0.4%	2	0.8%	2	0.8%	12	4.7%	38	4.3%	4	1.8%	5	2.3%	3	1.4%	26	11.9%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	1	0.5%
[22]授業の楽しさ 楽しいと思う授業は、どのくらいありますか。	146	14.2%	46	18.0%	36	14.0%	36	14.0%	28	10.9%	42	4.8%	11	5.0%	12	5.5%	7	3.2%	12	5.5%
ほとんどの授業が楽しい																				
楽しい授業の方が多い	489	47.6%	131	51.2%	126	49.0%	122	47.5%	110	42.8%	271	30.9%	73	33.3%	74	33.8%	62	28.3%	62	28.3%
楽しい授業の方が少ない	344	33.5%	69	27.0%	88	34.2%	88	34.2%	99	38.5%	451	51.5%	110	50.2%	113	51.6%	118	53.9%	110	50.2%
楽しい授業はほとんどない	48	4.7%	10	3.9%	7	2.7%	11	4.3%	20	7.8%	110	12.6%	25	11.4%	20	9.1%	31	14.2%	34	15.5%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	1	0.5%
[23]授業への積極性 授業中、進んで学習に取り組んでいると思いますか。	146	14.2%	46	18.0%	39	15.2%	32	12.5%	29	11.3%	151	17.2%	47	21.5%	40	18.3%	34	15.5%	30	13.7%
進んで取り組んでいると思う																				
どちらかといえば、進んで取り組んでいると思う	534	52.0%	152	59.4%	141	54.9%	133	51.8%	108	42.0%	475	54.2%	136	62.1%	123	56.2%	120	54.8%	96	43.8%
どちらかといえば、進んで取り組んでいないと思う	298	29.1%	51	19.9%	72	28.0%	79	30.7%	97	37.7%	200	22.8%	28	12.8%	43	19.6%	56	25.6%	73	33.3%
進んで取り組んでいないと思う	47	4.6%	7	2.7%	5	1.9%	13	5.1%	22	8.6%	49	5.6%	8	3.7%	13	5.9%	9	4.1%	19	8.7%
無回答・不明	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
[24]学習での達成感 授業中に、「そうか、わかった！」「やった、できた！」という気持ちになることがありますか。	253	24.6%	73	28.5%	73	28.4%	60	23.3%	47	18.3%	132	15.1%	42	19.2%	37	16.9%	27	12.3%	26	11.9%
よくある																				
時々ある	549	53.5%	117	45.7%	137	53.3%	147	57.2%	148	57.6%	494	56.4%	118	53.9%	123	56.2%	137	62.6%	118	53.0%
あまりない	174	16.9%	49	19.1%	40	15.6%	39	15.2%	46	17.9%	192	21.9%	46	21.0%	47	21.5%	44	20.1%	55	25.1%
まったくない	51	5.0%	17	6.6%	7	2.7%	11	4.3%	16	6.2%	57	6.5%	13	5.9%	12	5.5%	11	5.0%	21	9.6%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%
[25]学習での励み 授業中に、先生か友だちから、「すごいね！」「がんばったね」と言われることがありますか。	82	8.0%	35	13.7%	18	7.0%	9	3.5%	20	7.8%	37	4.2%	15	6.8%	8	3.7%	4	1.8%	10	4.6%
よくある																				
時々ある	456	44.4%	127	49.6%	113	44.0%	116	45.1%	100	38.9%	267	30.5%	89	40.6%	63	28.8%	60	27.4%	55	25.1%
あまりない	385	37.5%	78	30.5%	102	39.7%	99	38.5%	106	41.2%	413	47.1%	87	39.7%	112	51.1%	107	48.9%	107	48.9%
まったくない	104	10.1%	16	6.3%	24	9.3%	33	12.8%	31	12.1%	157	17.9%	28	12.8%	36	16.4%	47	21.5%	46	21.0%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	1	0.5%
[26]調べ方、調べ姿勢 学校の授業でわからないことがあったとき、どうしていますか。	265	25.8%	104	40.6%	61	23.7%	63	24.5%	37	14.4%	151	17.2%	80	37.4%	30	13.7%	34	15.5%	27	12.3%
自分で本や資料を探して調べる																				
先生に聞きに行く	233	22.7%	49	19.1%	57	22.5%	58	22.6%	69	26.8%	171	19.5%	50	22.8%	41	18.7%	34	15.5%	46	21.0%
友だちに教えてもらう	454	44.2%	87	34.0%	120	46.7%	123	47.9%	124	48.2%	432	49.3%	91	41.6%	116	53.0%	125	57.1%	100	45.7%
そのままにしておく	64	6.2%	13	5.1%	16	6.2%	11	4.3%	24	9.3%	113	12.9%	16	7.3%	29	13.2%	25	11.4%	43	19.6%
無回答・不明	11	1.1%	3	1.2%	3	1.2%	2	0.8%	3	1.2%	9	1.0%	2	0.9%	3	1.4%	1	0.5%	3	1.4%
[27]整理の仕方、まとめる姿勢 授業で使った資料やプリントをどうしていますか。	211	20.5%	48	18.8%	50	19.5%	64	24.9%	49	19.1%	383	43.7%	88	40.2%	100	45.7%	92	42.0%	103	47.0%
その場で、ファイルなどに綴じる																				
後で囲めて、ファイルなどに綴じる	300	29.2%	78	30.5%	75	29.2%	65	25.3%	82	31.9%	246	28.1%	78	36.6%	60	27.4%	61	27.9%	47	21.5%
とりあえず、しばらくはためておく	440	42.8%	112	43.8%	114	44.4%	108	42.0%	106	41.2%	224	25.6%	51	23.3%	57	26.0%	57	26.0%	59	26.9%
授業が終わったら捨てる	76	7.4%	18	7.0%	18	7.0%	20	7.8%	18	7.0%	18	2.1%	1	0.5%	1	0.5%	8	3.8%	8	3.7%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	0.6%	1	0.5%	1	0.5%	1	0.5%	2	0.9%
[28]発表の仕方、姿勢 授業中、答えがわかったり、自分の考えがまとまったりしたときどうしますか。	242	23.6%	97	37.9%	68	26.5%	47	18.3%	30	11.7%	86	9.8%	30	13.7%	26	11.9%	10	4.6%	20	9.1%
よく発表する																				
時々、発表する	415	40.4%	103	40.2%	108	42.0%	118	45.9%	86	33.5%	293	33.4%	84	38.4%	70	32.0%	79	36.1%	60	27.4%
あまり発表しない	251	24.4%	34	13.3%	54	21.0%	70	27.2%	93	36.2%	249	28.4%	61	27.9%	67	30.6%	60	27.4%	61	27.9%
ほとんど発表しない	119	11.6%	22	8.6%	27	10.5%	22	8.6%	48	18.7%	246	28.1%	44	20.1%	56	25.6%	69	31.5%	77	35.2%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	1	0.5%
[29]学習に向かう姿勢 学校の学習の中で、今は苦手なものでも、努力すれば、できるようにしたいと思いますか。	532	51.8%	153	59.8%	140	54.5%	126	49.0%	113	44.0%	376	43.2%	110	50.2%	86					

【37】対自分 …受容感 今の自分のことを好きだと思いますか。	そう思う	178	17.3%	47	18.4%	49	19.1%	46	17.9%	36	14.0%	80	9.1%	15	6.8%	24	11.0%	13	5.9%	28	12.8%
	まあそう思う	406	39.5%	118	46.1%	112	43.6%	85	33.1%	91	35.4%	288	32.9%	86	39.3%	72	32.9%	71	32.4%	59	26.9%
	あまりそうは思わない	288	28.0%	57	22.3%	70	27.2%	87	33.9%	74	28.8%	328	37.9%	87	39.7%	82	37.4%	82	37.4%	76	34.7%
	思わない	155	15.1%	34	13.3%	26	10.1%	39	15.2%	56	21.8%	176	20.1%	34	15.5%	36	16.4%	52	23.7%	54	24.7%
	無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	0.5%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.5%	2	0.9%

【基礎表2 保護者対象 生活意識調査結果】

質問項目	選択肢	小学校6年生 保護者 1027人										中学校3年生 保護者 876人									
		全員 (100%)	A群 (25%)	B群 (25%)	C群 (25%)	D群 (25%)	全員 (100%)	A群 (25%)	B群 (25%)	C群 (25%)	D群 (25%)	全員 (100%)	A群 (25%)	B群 (25%)	C群 (25%)	D群 (25%)					
【1】実態…テレビ視聴 お父さんの帰宅後、テレビやビデオなどのように見えていますか。	見る見ないにかかわらず、ほとんどいつもついている	373	36.3%	62	24.2%	84	32.7%	117	45.5%	110	42.8%	309	35.3%	66	30.1%	67	30.6%	85	38.8%	91	41.6%
	見たい番組だけ見ようとしている	592	57.6%	171	68.8%	152	59.1%	133	51.8%	136	52.9%	507	57.9%	134	61.2%	136	62.1%	125	57.1%	112	51.1%
	あまり見ない	51	5.0%	20	7.8%	15	5.8%	7	2.7%	9	3.5%	59	6.7%	18	8.2%	16	7.3%	9	4.1%	16	7.3%
	まったく見ない	10	1.0%	2	0.8%	6	2.3%	0	0.0%	2	0.8%	1	0.1%	1	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答・不明	1	0.1%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

【15】家庭学習への関わり 家でお子さんが学習しているときどう されていますか。	そばについて見ている	76	7.4%	13	5.1%	25	9.7%	15	5.8%	23	8.9%	20	2.3%	1	0.5%	7	3.2%	6	2.7%	6	2.7%
	子どもがやったら、確かめている	184	17.9%	45	17.6%	45	17.5%	45	17.5%	49	19.1%	27	3.1%	8	3.7%	1	0.5%	6	2.7%	12	5.5%
	動かしや注意の声をかけている	551	53.7%	147	57.4%	129	50.2%	142	55.3%	133	51.8%	450	51.4%	116	53.0%	114	52.1%	114	52.1%	106	48.4%
	とくに何もしていない	212	20.6%	51	19.9%	56	21.8%	55	21.4%	50	19.5%	376	42.9%	94	42.9%	97	44.3%	91	41.6%	94	42.9%
	無回答・不明	4	0.4%	0	0.0%	2	0.8%	0	0.0%	2	0.8%	3	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.9%	1	0.5%
【16】学習塾について お子さんを学習塾に行かせています か、また行かせようと思っています か。	現在、行かせているし、今後も行かせたい	397	38.7%	132	51.6%	100	38.9%	90	35.0%	75	29.2%	534	61.0%	153	69.9%	140	63.9%	125	57.1%	116	53.0%
	現在は行かせているが、今後は行かせないで おこうと思っている	28	2.7%	10	3.9%	5	1.9%	11	4.3%	2	0.8%	22	2.5%	6	2.7%	5	2.3%	6	2.7%	5	2.3%
	現在は行かせていないが、これから行かせ たいと思っている	334	32.5%	48	18.8%	88	34.2%	94	36.6%	104	40.5%	157	17.9%	21	9.6%	36	16.4%	48	21.9%	52	23.7%
	現在、行かせていないし、これからも行 かせようとは思わない	262	25.5%	64	25.0%	63	24.5%	61	23.7%	74	28.8%	159	18.2%	39	17.8%	38	17.4%	37	16.9%	45	20.5%
	無回答・不明	6	0.6%	2	0.8%	1	0.4%	1	0.4%	2	0.8%	4	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	3	1.4%	1	0.5%
【17】習い事について お子さんに学習塾以外の習いごと(ス ポーツや音楽、習字、英会話など)を させていますか、またさせようと思っ ていますか。	現在、させているし、今後もさせたい。	682	66.4%	175	68.4%	178	69.3%	172	66.9%	157	61.1%	319	36.4%	90	41.1%	93	42.5%	80	36.5%	56	25.6%
	現在はさせているが、今後はやめさせよう と思っている	26	2.5%	8	3.1%	5	1.9%	8	3.1%	5	1.9%	25	2.9%	5	2.3%	6	2.7%	6	2.7%	8	3.7%
	現在はさせていないが、これからさせたい と思っている	190	18.5%	43	16.8%	44	17.1%	44	17.1%	59	23.0%	190	21.7%	39	17.8%	37	16.9%	52	23.7%	62	28.3%
	現在、させていないし、これからもさせ ようとは思わない	127	12.4%	29	11.3%	30	11.7%	33	12.8%	35	13.6%	337	38.5%	83	37.9%	83	37.9%	80	36.5%	91	41.6%
	無回答・不明	2	0.2%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	5	0.6%	2	0.9%	0	0.0%	1	0.5%	2	0.9%
【18】授業参観や懇談会への参加 学校での教育活動にどのくらい参加 されていますか。	授業参観にも懇談会にもほとんど参加 する	418	40.7%	133	52.0%	111	43.2%	96	37.4%	78	30.4%	245	28.0%	77	35.2%	58	26.5%	61	27.9%	49	22.4%
	授業参観には行くが、懇談会にはあまり 参加しない	423	41.2%	90	35.2%	88	34.2%	113	44.0%	132	51.4%	190	21.7%	44	20.1%	48	21.9%	58	26.5%	40	18.3%
	懇談会には参加するが、授業参観には あまり行かない	23	2.2%	7	2.7%	7	2.7%	3	1.2%	6	2.3%	135	15.4%	41	18.7%	33	15.1%	27	12.3%	34	15.5%
	授業参観にも懇談会にもほとんど参加 しない	161	15.7%	26	10.2%	50	19.5%	45	17.5%	40	15.6%	304	34.7%	57	26.0%	79	36.1%	73	33.3%	95	43.4%
	無回答・不明	2	0.2%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	1	0.4%	2	0.2%	0	0.0%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.5%
【19】学校行事やPTA活動への参加 運動会や学芸会などの学校行事や家 庭教育学級や文化活動などのPTAの 行事にどのくらい参加されています か。	学校行事にもPTA行事にもほとんど参加 する	264	25.7%	65	25.4%	87	33.9%	59	23.0%	53	20.6%	142	16.2%	45	20.5%	35	16.0%	35	16.0%	27	12.3%
	学校行事には参加するが、PTA行事には あまり参加しない	647	63.0%	175	68.4%	139	54.1%	168	65.4%	165	64.2%	429	49.0%	117	53.4%	105	47.9%	114	52.1%	93	42.5%
	PTA行事には参加するが、学校行事には あまり参加しない	11	1.1%	1	0.4%	0	0.0%	5	1.9%	5	1.9%	38	4.3%	10	4.6%	8	3.7%	8	3.7%	12	5.5%
	学校行事にもPTA行事にもほとんど参加 しない	105	10.2%	15	5.9%	31	12.1%	25	9.7%	34	13.2%	265	30.3%	47	21.5%	71	32.4%	62	28.3%	85	38.8%
	無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.9%
【20】担任とのコミュニケーション 担任の先生とお子さんのことで話し 合いますか。	自分から話に行くようにしている	186	18.1%	47	18.4%	45	17.5%	43	16.7%	51	19.8%	91	10.4%	22	10.0%	18	8.2%	25	11.4%	26	11.9%
	先生から話があれば話し合っている	244	23.8%	50	19.5%	53	20.6%	68	26.5%	73	28.4%	235	26.8%	47	21.5%	50	22.8%	66	30.1%	72	32.9%
	懇談会などで話し合っている	401	39.0%	119	46.5%	117	45.5%	92	35.8%	73	28.4%	356	40.6%	100	45.7%	96	43.8%	81	37.0%	79	36.1%
	ほとんど話し合うことはない	179	17.4%	37	14.5%	40	15.6%	51	19.8%	51	19.8%	183	20.9%	47	21.5%	54	24.7%	45	20.5%	37	16.9%
	無回答・不明	17	1.7%	3	1.2%	2	0.8%	3	1.2%	9	3.5%	11	1.3%	3	1.4%	1	0.5%	2	0.9%	5	2.3%
【21】担任や教師に対する評価 学校の先生についてどう思っておら れますか。	子育ての悩みなど気軽に相談できる	109	10.6%	19	7.4%	35	13.6%	28	10.9%	27	10.5%	60	6.8%	11	5.0%	15	6.8%	13	5.9%	21	9.6%
	信頼して子どもをまかすけている	608	59.2%	167	65.2%	151	58.8%	149	58.0%	141	54.9%	433	49.4%	105	47.9%	123	56.2%	100	45.7%	105	47.9%
	子どもへの指導の仕方にも不満がある	116	11.3%	32	12.5%	23	8.9%	29	11.3%	32	12.5%	125	14.3%	20	9.1%	37	16.9%	35	16.0%	35	16.0%
	親への接し方に疑問がある	12	1.2%	1	0.4%	1	0.4%	4	1.6%	6	2.3%	9	1.0%	1	0.5%	3	1.4%	3	1.4%	2	0.9%
	何も思っていない	160	15.6%	32	12.5%	44	17.1%	44	17.1%	40	15.6%	230	26.3%	66	30.1%	55	25.1%	60	27.4%	49	22.4%
	無回答・不明	22	2.1%	5	2.0%	3	1.2%	3	1.2%	11	4.3%	19	2.2%	3	1.4%	3	1.4%	6	2.7%	7	3.2%
【22】学校に対する評価 お子さんが通う学校についてどう思っ ておられますか。	親も満足している	646	62.9%	173	67.6%	166	64.6%	157	61.1%	150	58.4%	402	45.9%	106	48.4%	115	52.5%	98	44.7%	83	37.9%
	親は信頼して通わせているが、子どもは あまり満足していない	31	3.0%	3	1.2%	10	3.9%	9	3.5%	9	3.5%	71	8.1%	20	9.1%	16	7.3%	15	6.8%	20	9.1%
	子どもは楽しんで通っているが、親は あまり満足していない	139	13.5%	31	12.1%	37	14.4%	43	16.7%	28	10.9%	106	12.1%	25	11.4%	25	11.4%	24	11.0%	32	14.6%
	親子とも不満がある	37	3.6%	12	4.7%	4	1.6%	6	2.3%	15	5.8%	79	9.0%	20	9.1%	8	3.7%	27	12.3%	24	11.0%
	何も思っていない	153	14.9%	34	13.3%	37	14.4%	38	14.8%	44	17.1%	198	22.6%	45	20.5%	49	22.5%	50	22.8%	54	24.7%
	無回答・不明	21	2.0%	3	1.2%	3	1.2%	4	1.6%	11	4.3%	20	2.3%	3	1.4%	6	2.7%	5	2.3%	6	2.7%
【23】保護者同士のコミュニケーション 他の保護者とのようにつきあってお られますか。	普段から家族ぐるみでつきあっている 保護者がいる	326	31.7%	76	29.7%	83	32.3%	90	35.0%	77	30.0%	193	22.0%	57	26.0%	50	22.8%	49	22.4%	37	16.9%
	学校の行事やPTAの活動などでつきあ っている保護者がいる	305	29.7%	91	35.5%	79	30.7%	71	27.6%	64	24.9%	229	26.1%	73	33.3%	59	26.9%	54	24.7%	43	19.6%
	最小限のつきあいにとどめている	258	25.1%	65	25.4%	63	24.5%	65	25.3%	65	25.3%	253	28.9%	50	22.8%	71	32.4%	66	30.1%	66	30.1%
	つきあいはほとんどない	123	12.0%	21	8.2%	30	11.7%	27	10.5%	45	17.5%	189	21.6%	37	16.9%	37	16.9%	47	21.5%	68	31.1%
	無回答・不明	15	1.5%	3	1.2%	2	0.8%	4	1.6%	6	2.3%	12	1.4%	2	0.9%	2	0.9%	3	1.4%	5	2.3%
【24】地域の子ども 近所の子どもとどのように接してお られますか。	普段から家族ぐるみで接している子ど もがいる	312	30.4%	70	27.3%	84	32.7%	83	32.3%	75	29.2%	188	21.5%	50	22.8%	57	26.0%	45	20.5%	36	16.4%
	地域の行事や活動などで接する子ど もがいる	355	34.6%	109	42.6%	83	32.3%	87	33.9%	76	29.6%	248	28.3%	77	35.2%	55	25.1%	63	28.5%	53	24.2%
	顔を知っている程度の子どもはいる	293	28.5%	68	26.6%	77	30.0%	65	25.3%	83	32.3%	335	38.2%	75	34.2%	77	35.2%	88	40.2%	95	43.4%
	ほとんど接することがない	51	5.0%	5	2.0%	11	4.3%	18	7.0%	17	6.6%	91	10.4%	14	6.4%	27	12.3%	19	8.7%	31	14.2%
	無回答・不明	16	1.6%	4	1.6%	2	0.8%	4	1.6%	6	2.3%	14	1.6%	3	1.4%	3	1.4%	4	1.8%	4	1.8%
【25】教育情報の入手 教育や子育てに関する情報をどこか ら得ておられますか。	学校での懇談会や学習会	118	11.5%	24	9.4%	35	13.6%	27	10.5%	32	12.5%	84	9.6%	23	10.5%	25	11.4%	19	8.7%	17	7.8%
	学校から配布されるプリントやパンフ レット	302	29.4%	71	27.7%	71	27.6%	82	31.9%	78	30.4%	266	30.4%	64	29.2%	65	29.7%	72	32.9%	65	29.7%
	新聞やテレビ、インターネット	215	20.9%	63	24.6%	54	21.0%	61	23.7%	37	14.4%	188	21.5%	49	22.4%	41	18.7%	49	22.4%	49	22.4%
	教育に関わる講演会や講座	16	1.6%	2	0.8%	3	1.2%	3	1.2%	8	3.1%	14	1.6%	5	2.3%	4	1.8%	1	0.5%	4	1.8%
	教育に関わる図書や雑誌	42	4.1%	15	5.9%	12	4.7%	9	3.5%	6	2.3%	23	2.6%	7	3.2%	6	2.7%	8	3.7%	2	0.9%
	知人や近所の人	250	24.3%	63	24.6%	66	25.7%	53	20.6%	68	26.5%	213	24.3%	57	26.0%	56	25.6%	55	25.1%	45	20.5%
	とくにない	56	5.5%	13	5.1%	10	3.9%	16	6.2%	17	6.6%	67	7.6%	12	5.5%	16	7.3%	9	4.1%	30	13.7%
	無回答・不明	28	2.7%	5	2.0%	6	2.3%	6	2.3%	11	4.3%	21	2.4%	2	0.9%	6	2.7%	6	2.7%	7	3.2%
【26】学校や教師に求めること 今の学校に対して最ももめたいこと はどんなことですか。	子どもの気持ちをしっかりとつむこと</																				